

市立函館博物館

研究紀要

第 15 号

2005

市三函館博物館

研究紀要

第 15 号

2005

序

このたび『市立函館博物館研究紀要』第15号を刊行するはこびとなりました。

本号は、古文書調査講座の参加者山口精次氏による「酒谷小三郎の画業」、北海道教育委員会文化課西脇対名夫氏の解説による「能登川隆氏日記の考古学・人類学関係記事」の2題を掲載いたしました。

当市立函館博物館には、歴史や考古はじめ、多岐にわたる資料が収蔵されておりますが、今回それら多くの資料の中から、古文書「酒谷家資料」および考古資料「能登川コレクション」を焦点に執筆いただいたものであります。

はじめに、山口精次氏ご寄稿の「酒谷小三郎の画業」であります。山口氏は、博物館主催の通年講座で取り扱っている「酒谷家資料」から「酒谷小三郎」を知り、その生涯に大きな関心を抱いたことから、その足跡を辿りながら意欲的に調査を続けられ、標題にあります「画業」を追い、そして描かれた多彩な作品を紹介するとともに画家「酒谷小三郎」の人間像に迫ったものになっており、今後大いに活用が期待されるものと考えております。

次に、西脇対名夫氏からご寄稿の「能登川隆氏日記の考古学・人類学関係記事」についてであります。能登川氏が収集した出土品は、道・市指定有形文化財を多数含む「能登川コレクション」として発掘記事等とともに貴重な考古資料の一群を形成しております。しかし、西脇氏も触れておりますが、経緯の把握が十分と言えない状況にあって、氏は豊かな経験と知識をもとに、残された発掘記録等を詳細に調査され、出土品や発掘の状況を具体的に明かしていることなど、今後の調査研究の大きな道しるべであると考えており、各方面で有効な活用がなされるものと思っております。

結びになりますが、関係各位におかれましては、今後ともご意見等を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年3月31日

市立函館博物館長
佐野 幸治

目次

序

酒谷小三郎の画業

山口精次……………1

能登川隆氏日記の考古学・人類学関係記事

故 能登川 隆
解説 西脇 对名夫……………19

酒谷小三郎の画業

山口 精 次

はじめに

酒谷小三郎は商家に生れ、家業に就きながら生涯画道に精進した人である。大正11年の第3回赤光社展から出品を始め、大正14年の北海道美術協会（以下道展）結成には創立会員として函館から参加し、大正15年と昭和3年に帝国美術院展覧会（以下帝展）に入選した。春陽会、槐樹社、太地社に出品、入選するなど旺盛な制作意欲を示し、道内は勿論中央画壇でも活躍した画家であった。しかし昭和5年、官展・在野展から遠のき、戦後函館を離れたため、今では郷土函館での知名度も低く、戦後の新しき村展覧会での活動はほとんど知られていない。

酒谷家に残された膨大な文書類が函館在住の子孫の方から市立函館博物館に寄贈され、『酒谷家資料』として平成13年度から同館「古文書調査講座」で順次整理、解読中である。この作業過程で五代目が三つの画号を持つ画家であった事がわかり、画業を調べる切掛けとなった。

本稿は主として当時の新聞と展覧会出品目録を資料とし、酒谷小三郎の活動の跡を年代順に辿り、展覧会と作品を詳述した。各展覧会の様子は新聞評とおもな出品者で示し、酒谷小三郎が出品した展覧会の会期、会場、出品作品、典拠資料は別表とした。旧字、異体字、旧仮名遣い等は基本的に改めて記し、適宜句読点を加えた。

生い立ち

酒谷小三郎は四代目小三郎と吉永コノの一人息子として明治28年5月20日函館に生まれた⁽¹⁾。酒谷家は加賀国江沼郡橋立村字小塩（現 石川県加賀市）の出身で、北前船経営に従事した。当主は代々小三郎を襲名し、明治15年頃四代目小三郎の時、商売の拠点を函館に置いた。店は函館区西浜町37番地（現 弁天町）で家印は∞（ワチガイ）、酒谷小三郎店と称した⁽²⁾。雑貨荒物、米穀、酒、塩および煙草等を取扱い、商売繁盛、裕福な商家であった。画家の酒谷小三郎は五代目で、幼名は孝輔と言ひ、少年期は石川県江沼郡橋立村字小塩ヤ百七番地の酒谷イヨ（四代目小三郎の妻）のもとで過ごした。明治35年4月橋立北浜尋常高等小学校尋常科（現 橋立小学校）に入学⁽³⁾、明治43年3月同高等科を卒業、同年4月石川県の中学校に入学、大正3、4年頃卒業したと思われる⁽⁴⁾。その後東京川端画学校（後の川端絵画研究所）に学んだ。函館で家業を継いだのは、大正8年に合資会社酒谷商店を創立し、その代表社員になっていること、大正7年5月15日の函館新聞に実母の喪主として名前が見えることから、大正7年頃と推定される。

五代目小三郎は酒谷商店を經營し、取引は道内は元より樺太および三陸方面にわたった。大正8年株式会社塩販売所取締役に就任し、昭和7年に函館商工会議所議員に当選、ほか七星商事株式会社取締役、七尾水産株式

会社取締役を務めた。昭和10年には北日本油脂工業株式会社常務取締役に就任、函館経済界で活躍した。経済界では「…氏の趣味として洋画を能く物するが、各種の展覧会に入選し函館市に於ける一流の大家である⁽⁶⁾」と評価されていた。昭和5年から商売に専念し、展覧会から遠のき、昭和17年頃から東京で事業をしていた。戦後は娘夫婦に家業を譲り経営の第一線から退き、制作に専念するため鎌倉へ移住。武者小路実篤の「新しき村」に共感、新しき村展覧会に出品を続け、昭和32年6月20日鎌倉で永眠した⁽⁷⁾。

画家としての活動

酒谷小三郎の活動は、活動の拠点を函館から鎌倉へ移すのを界として、戦前と戦後に大きく分けられる。戦前はさらに、大正11年10月第3回赤光社展から大正15年9月第2回道展までの「黒田山洋」時代と大正15年10月第7回帝展から昭和17年9月第18回道展までの「酒谷小三郎」時代の二つに分けられる。戦後は昭和22年10月第2回北海道日本画院展から昭和32年6月までの「大聖寺古郷」時代。酒谷小三郎は大正11年8月黒田綾子と結婚し、画号の黒田は妻の旧姓から採ったものである。山洋は不詳だが、大正11年頃に建てられた船見町高台にあったアトリエも『山洋荘』と名付けられている。また画号が黒田山洋から酒谷小三郎に変わるが、黒田山洋と酒谷小三郎が同一人物であることを伝える新聞記事がある。大正15年10月第7回帝展初入選を伝える函館新聞で「…酒谷小三郎（32）氏は酒谷商店御主人だが、それよりも郷土洋画家の間に黒田山洋として多く知られ⁽⁸⁾…」とあり、この時期に画号が変わったことが判る。戦後は大聖寺古郷という画号を用いた。少年期を過ごした小塩への思いから、このような画号

を付けたのだろうか。小塩は江戸時代に大聖寺藩の在ったところで、大聖寺の地名は現在の石川県加賀市の中心街に残されている。酒谷小三郎と大聖寺古郷が同一人物であることを伝える新聞記事がある。昭和29年8月大聖寺古郷油彩小品展を伝える函館新聞で「大聖寺古郷氏とは市内西浜町昭栄石油会社並びにワチガイ印酒谷商店の社長酒谷小三郎の画号で、武者小路実篤、椿貞雄氏などと『新しき村美術会』のトリオで⁽⁹⁾…」とあり、戦後画号が変わったことが判る。実は戦後一度だけ、昭和22年5月第1回新しき村美術展覧会では酒谷古郷で出品している。次に各画号を使用した時期における酒谷小三郎の活動の跡を述べてみたい。

1、「黒田山洋」時代の活動

大正11年

この年赤光社へ初出品している。赤光社は大正10年2月10日結成され、創立会員には内山精一、天間正五郎、近岡外治郎、池谷寅一等がいた。当時は北海道に於ける最大の美術団体で、酒谷小三郎は結成翌年の大正11年から同人として参加している。

第3回赤光社展は10月に開催され、酒谷小三郎は「静物」外1点を出品した。14日の函館新聞は「黒田山洋氏は研究所出身の洋画家であるが、流石にデッサンの確なることは同人の齊しく認むる処である」とデッサン力の高さが評価されている。大正15年10月12日の小樽新聞によると「帝展に出品したのは七八年前に一回ありますが、其時は落選しました」とある事から、既に大正7、8年頃から各展覧会に出品していた事が伺える。だが大正11年以前の函館の新聞では作品の発表は見当たらず、これが函館での最初の出品と考えられる。主な出品者と作品は池谷寅一「初秋風景」、近岡外治郎「白い道の風景」、田辺三重松

「ダリヤ」、笹野順太郎「静物」、天間正五郎「秋日小景」など。

大正12年

第4回赤光社展は9月に開催され、酒谷小三郎は「人物」3点、「静物」を出品した。9月1日に関東大震災が起こり、10月に開催された震災義捐全函館絵画展覧会では同じ作品を出品している。10月3日の函館新聞は「赤光社では黒田山洋氏の人物数点が眼に入る」と会場では一際目を引く様子が伝えられている。4日の函館新聞には「全函館画家の作品の搬入」と題した写真が掲載され、その中央に「西洋婦人像」（北海道立函館美術館蔵）によく似た作品が確認できる。この作品は大正15年頃の作とされているが、新聞に掲載された写真の作品が「西洋婦人像」であれば、制作年代を大正12年頃と特定できる。主な出品者と作品は池谷寅一「二月の風景」、近岡外治郎「林檎在る静物」、田辺三重松「静物」、山口君之助「風景」、内山精一「白い花」、天間正五郎「玉葱の静物」、笹野順太郎「自画像」、秋山任「静物」、前田政雄「朝の光り」、佐野忠吉「風景」など。

大正13年

第5回赤光社展は9月に開催され、酒谷小三郎は「風景」2点、「静物」を出品した。19日の函館新聞は「現代仏蘭西展の影響の見える大石・黒田両氏の作品などは人目を惹くものである」と作風を伝えている。主な出品者と作品は岩船修七^(マ)「静物」池谷寅一「天使園付近の秋」、笹野杜二「(画題未定)」、笹野順太郎「喜べる操子の像」、前田政雄「夏海辺」、福田寛「水辺(大沼にて)」、内山麓人(精一)「塀に沿う道」、田辺三重松「夜の静物」、近岡外治郎「静物(林檎及び皿のある)」、天間正五郎「風景」など。

大正14年

この年から赤光社だけでなく北海道美術協会にも出品し、函館から全道へ活動の場を拓げる。

北海道美術協会は大正14年6月に結成した。函館からは創立会員として内山精一、天間正五郎、池谷寅一、近岡外治郎、黒田山洋が参加した。黒田山洋を除く4名は赤光社の創立会員である。

第1回道展は10月に開催され、洋画で酒谷小三郎は「田尻川の景」、「加州片山津温泉湯本の景」を出品した。いずれも少年期を過ごした江沼郡橋立村近辺を題材にした作品である。田尻川は大聖寺川水系に属する流長3km弱の川で橋立丘陵を北流し、加賀市、高尾町、田尻川を経て尼御前岬の西、橋立漁港東端で日本海に注ぐ。片山津は小塩の東約5km、柴山潟の南岸にある温泉地である。函館からの主な出品者と作品は洋画では古谷新太郎「風景」、笹野順太郎「男の顔」、近岡外治郎「馬鈴薯のある塚の静物」、池谷寅一「八月の風景」、内山精一「裸婦」、天間正五郎「裸婦小品」など。ほかに能勢真美「婦人像」など。日本画は笹野順太郎「冬の日のひっそりと暮るる」、石川金洞「摩耶夫人」、山本玉溪「紅梅」など。

函館商業学校洋画展覧会は10月に開催され、好意出品として赤光社から黒田山洋と天間正五郎が参加し、錦巷会から福田寛、田辺三重松、秋山任、佐野忠吉、沖田久吉が参加した。作品名は不詳である。商業学校の主な出品者と作品は4年能戸幸「緑町早春」(油絵)、3年岩船修吉「静物」(水彩)、山本久蔵「夜の宵像」(パステル)など。

大正15年

この年赤光社、道展の出品に加え帝展に初入選を飾る。

第一回ゼラニウム会洋画小品展は4月に開

催され、出品者の多くは商業学校の生徒で、それに師範1名、他校生徒1名が参加した。ほかに後援の作品と特別出品があった。酒谷小三郎は作品（未定）を出品した。主な出品者と作品は会友では日野栄之助「静物」、山本久蔵「風景」など。会員では岩船修吉「カプラ」、能戸幸「白い土蔵のある風景」などがあり、後援者では近岡外治郎「静物」、田辺三重松「風景」、天間正五郎「籠中諸花」、東政雄「風景」、秋山任「シヤクヤク」、斉藤駒翁「静物」、佐野忠吉「静物」、三方正之助「無題」、池谷寅一「風景」など。ほかに内山麓人（精一）、古谷新太郎、福田寛、笹野順太郎などが出品し、特別出品は山本晴康（行雄）「娘」（日本画）であった。

第7回赤光社展は6月に開催され、酒谷小三郎は「裸婦水浴」を出品した。13日の函館新聞は「黒田山洋氏の大作裸婦水浴も人目をひく」と会場の様子を伝えている。天間正五郎は後に酒谷小三郎を「裸体画をよくする人少き当会（赤光社）に於て第一の作者また水墨に秀えでたる腕を持つの人」と評している。主な出品者と作品は池谷寅一「山懐の秋と街景」、笹野順太郎「風景」、天間正五郎「赤い盆」（春陽会入選）、内山麓人（精一）「川に沿う道」など。ほかに近岡外治郎、東政雄が出品した。

第2回道展は9月に開催され、洋画で酒谷小三郎は「諸果」を出品した。主な出品者と作品は天間正五郎「花」、能勢真美「青い鳥」、田辺三重松「静物」、池谷寅一「郊外の夏」、内山麓人（精一）「読書する少年」、近岡外治郎「谷地頭風景」、古谷新太郎「風景」、前田政雄「代々木風景」、笹野順太郎「幼女と人形」など。日本画は山本玉溪「農をつかさどる」など。この時、古谷新太郎は協会賞、天間正五郎は市長賞を獲得し、田辺三重松は会

員推薦に決定した。

2、「酒谷小三郎」時代の活動

大正15年

第7回帝展は10月に開催され、搬入総数2,308点の内154点が入選し、新入選は56点であった。⁽¹¹⁾酒谷小三郎は「花」を出品し、初入選した。帝展の洋画で、北海道在住者から入選したのは酒谷小三郎が初めてであった。因に北海道出身者の上野山清貢は東京在住で大正13年10月第5回展で「とかげを弄び夢見る島の少女」が初入選している。⁽¹²⁾酒谷小三郎の後には昭和5年10月第11回展で札幌在住の能勢真美「緑庭」が初入選した。⁽¹³⁾酒谷小三郎の「花」（12号）は「煤竹の張籠へ牡丹と雛菊を活けたものを描いた」もので、酒谷小三郎は制作意図を「明暗たけて表現する洋画の手法の内に何か力強い行き方を発見するつもりでこの春以来苦しんでいましたが明暗に手頼らない描法で生かして見るつもりで描いたのがあの画です、一口に言えば南画などで描かれたところよりむしろ余日に残された味と言う様なもの…余日とでも言いますかこれを洋画に生かして見たので私としては最初の試みである」と述べている。⁽¹⁴⁾12日の函館新聞は「その手法もモチーフの扱い方も全く旧套を脱し所謂帝展の洋画としては飛躍を極めたもの…」と激賞している。酒谷小三郎の帝展初入選は全道的に話題になり函館画壇にも多大なセンセーションを巻き起こした。12日の函館新聞で内山精一は「酒谷氏は吾々の内でも大作をなさる方で非常な勉強家でしたが、今迄同人として出品したものの内では『裸婦』など優れていました。一体の傾向は晦かったが最近非常に明るくなり新手法を出すべく苦心していられた様だが吾々の仲間から入選者を出した事は嬉しくてなりません」と語っている。「花」については、南部集五郎が「我観

函館洋画工⁽¹⁵⁾の中で「われわれが氏の画に接する、一見進歩的と見られ、全駆的と感じられる奔放なる表現の中に常に影の如く浸潤する寂寞さを見逃すわけには行かない。この閑寂こそは、実に氏の闊達なる絵画に『気品』を添えるものであり、その構想に瞑想的な深みを与えるものである」と作品からある種の寂寞さを感じとっている。後に阿部たつをも酒谷小三郎のことを「酒谷さんは気むずかしい人であった。自分だけの領域をもって居られたからである。また孤高寂寥⁽¹⁶⁾の人であった」と語っている。作風が暗さから明るさに変わった背景には何があったのだろうか。3月に生まれた娘の誕生が関わっているのかも知れない。

函館美術展覧会は10月に開催され、函館の青年同好者間で組織されていた錦巷会が主催した。酒谷小三郎は帝展に初入選した「花」を出品した。この時の主な出品者と作品は洋画で天間正五郎「静物」、田辺三重松「静物」、秋山任「人物」、古谷新太郎「風景」など。日本画は山本玉溪「白梅」など。昭和2年

この年函館で初めての個展を開催したほか春陽会に初入選し、さらに中央で活動の場を拓げた。

酒谷小三郎の最初の個展は3月に函館で開催された。出品した作品は「裸婦」6点、「静物」6点、「花」6点、「風景」5点、「舞子」、「赤きポーシの女」、「グラス持つT氏」、「O氏像」、「自画像」、「曲馬団」、「曲馬団の楽屋」、「娘剣舞」、「ルイ朝式椅子のある静物」の32点。13日の函館新聞は「帝展に市内洋画家中で最初の入選の光栄を得た酒谷商店の主人酒谷小三郎は黒田山洋と号して赤光社同人として有名である。その個人展覧会は…開会早々場所柄観覧者が詰切り非常に賑わって居

た」と伝え、裸婦については大作が3点あり、来会者の興味を引き、静物はやわらかい感じを思わせ、花は得意とするだけに全部が力作である。風景はアトリエ「山洋荘」からの眺望を描いたものである、人物画には赤光社で交流の深い天間氏を描いたものもある等と「船見町のアトリエで洋画に精進した結晶であるだけに…酒谷氏の個展は時期と場所がよいのと傑作が揃ふているので評判なのも無理でない」と盛況を伝えている。

第5回春陽会展は4月に開催され、総出品2,654点中、酒谷小三郎は「東京娘剣舞」が入選した⁽¹⁷⁾。ほかに函館からは池谷寅一も入選している。

赤光社同人の洋画小品展は6月に開催され、酒谷小三郎は「風景」、「花籠」(平折)、「静物」(平折)を出品した。

出品者と作品は池谷寅一「雪搔」、内山麓人「室内」、近岡外治郎「芍薬」、天間正五郎「湯の川風景」、笹野順太郎「暁」、笹野杜一⁽¹⁸⁾「紫陽花」など。

第8回赤光社展は7月に開催され、酒谷小三郎は「風景」、「お化粧」、「花」、「或るポーズ」、「曲馬団」を出品した。主な出品者と作品は内山麓人(精一)「支那鉢を配せる図」、天間正五郎「近郊晩春」、笹野順太郎「吹雪」、近岡外治郎「西瓜」、池谷寅一「秋日」、前田政雄「谷中風景」、能戸幸「鮫川風景」など。

第3回道展は9月に開催され、洋画で酒谷小三郎は「雛妓」、「裸婦」、「ガンガン寺風景」2点を出品した。主な出品者と作品は前田政雄「湯の浜風景」、池谷寅一「港の展望」、笹野順太郎「冬の日」、近岡外治郎「西瓜」、内山麓人(精一)「うるめる春」、東政雄「コーヒー壺と玉葱」、田辺三重松「花」、天間正五郎「夏日」、古谷新太郎「郊外夏景」など。日本画は谷口玉湖「沈む思い」、炭光任「悟

れば迷えば」、笹野順太郎「ねむり」など。

昭和3年

この年再び帝展に入選した。

第4回道展は9月に開催され、洋画で酒谷小三郎は「東京娘剣舞」(春陽会入選)、「菊花」、「宵祭絵場戯彩」を出品した。主な出品者と作品は内山麓人(精一)「庭園風景」、東政雄「冬の山」、池谷寅一「冬の海」、古谷新太郎「湯の川風景」、天間正五郎「静物」、近岡外治郎「谷地頭風景」、前田政雄「真鶴港」、能戸幸「寺院のある風景」、田辺三重松「静物」など。日本画は笹野順太郎「冬林」など。

第9回帝展は10月に開催され、搬入総数2,837点の内420点が入選した⁽¹⁸⁾。酒谷小三郎は「巴港風景」を出品、再び入選した。「巴港風景」(30号)は男爵藤田氏の弟藤田徳治郎氏に500円で買い上げられた⁽¹⁹⁾。

第9回赤光社展は11月に開催され、酒谷小三郎は「太夫」「雛妓」「村芝居」を出品した。主な出品者と作品は前田政雄「赤城山」、池谷寅一「大沼小景」(春陽会入選)、能戸幸「街頭秋景」、東政雄「道庁風景」、山口潔「帝大構内」(中央美術社展出品)、近岡外治郎「谷地頭風景」、笹野順太郎「港を望む」、天間正五郎「壺の小菊」、古谷新太郎「郊外風景」、内山麓人(精一)「柿」など。

昭和4年

この年函館で二回目の個展を開催した。また小樽の太地社、中央画壇の槐樹社へ出品し、意欲的な活動を見せる。

第6回槐樹社展は3月に開催され、酒谷小三郎は「ポプラ」を出品、入選した。北海道からは上野山清貢が「虎邱山麓」を出品している。

第5回太地社展は7月に開催され、酒谷小三郎は「魚の静物」を出品した。太地社は小樽と札幌の画家が中心となって大正13年に結

成し、第5回展から函館の画家も参加している。函館からの出品は、会員でほかに天間正五郎「花」、公募では池谷寅一「晩秋の山」、国松登「夏の午後」、能戸幸「晩秋麗日」、笹野順太郎「街景」などが入選している。

第5回道展は9月に開催され、洋画で酒谷小三郎は「静物」を出品した。主な出品者と作品は東政雄「諸果」、能戸幸「神戸近郊」、笹野順太郎「元町風景」、近岡外治郎「婦人像」、前田政雄「郊外早春」、池谷寅一「菊」、内山麓人(精一)「静物」天間正五郎「早春近郊」、田辺三重松「百合」など。日本画は笹野順太郎「食事」、炭光任「語るもの」など。

第1回函館美術協会展は10月に開催され、酒谷小三郎は「風景」を出品した。函館美術協会は昭和4年春に函館在住の洋画家、日本画家40数名によって結成された会である。主な出品者と作品は洋画で秋山任「風景」、池谷寅一「有珠湾小景」、田辺三重松「七飯浜」、内山麓人(精一)「大沼風景」、天間正五郎「盛夏村道」、三方正之助「静物A」、能戸幸「街頭初秋」、佐野忠吉「ストーブに倚る女」など。日本画は山本玉溪「松竹梅」、谷口玉湖「振動」など。

酒谷小三郎の二回目の個展は11月に開催された。出品した作品は「聖堂の辺」6点、「花」6点、「裸婦」8点、「静物」3点、「子供」2点、「M子」、「T子」、「大夫」、「ポプラ」、「村芝居」の30点。20日の函館新聞は「同氏は今日迄展覧会に出品し名声を博した画歴をもつが氏の出品の主なるものは、一九二六年帝国美術院展覧会出品、一九二七年春陽会出品、一九二八年帝展出品、一九二九年槐樹社展出品。尚氏は北海道美術協会、太地社、赤光社に関係し函館人の最も知る人であり、其展覧会に同好者は多大の期待をもっている」

とこれまでの経歴を紹介をしている。「酒谷氏の個展を見る⁽²⁰⁾」では「個人展覧会として従来見ない程ガッシリした大作が多い、殊に(十三番)裸婦の中一最近作『ニンフテラベスク』は作者が多年力を注いだ作品で、十三人の裸婦を以て古代ギリシヤ風に見る大きな模様を明るい彩色を添えてある大きなポリントを深刻に表現せしめて観衆に驚異を与えてる。静物では『レモン』『ある静物』は添色の配合に作者独特の筆を随所に見せている。兎に角に珍しく多くの洋画展覧会を開いた函館美術会も今回また同氏の作品に依って更に色をそえた事を喜ばしく思う」と絶賛している。本人は出品目録で「今諸法の作品を一室に集めて正視するのは恐ろしい事ではあるが、今度の個展は仕事への整理でもあり、自分への過酷な精算でもあるのである」と個展の意気込みと決意を語っているが、翌5年官展・在野展から遠のく事を暗示させる言葉である。

昭和5年から昭和9年

友人の版画家天間正五郎は『赤光人素描⁽²¹⁾』で「近来家事多忙と称して、筆を持たざる半歳余、今回の展覧会に君の大作を見ることの出来ないのが何よりの恨事です」と語っている様に、新聞や出品記録を調べた限り何処にも作品を発表していない。商売に専念し出品できないという状況の変化があったと思われるが、理由は今のところよく分からない。

昭和10年

第1回北海道新作美術協会展は6月に開催され、酒谷小三郎は出品しているが作品名は不詳である。北海道新作美術協会は本道に在住し、春陽会に出品発表した新画家連の組織である。主な出品者と作品は、協会同人は笹野順太郎「湖畔干網」、橋本三郎⁽²²⁾「西伊豆風景」、池谷寅一「初夏晴日」、能戸邦治「風景」、西田秀雄「早春の港」など。

昭和15年

第17回赤光社展は11月に開催され、酒谷小三郎は創立20周年記念会員回顧作品として「静物」(大正末期作)を出品した。主な出品者と作品は会員で東政雄「梨畠」、山口潔「立石風景」、前田政雄「黒猫」、山口君之助「小樽風景」、笹野順太郎「沼畔新緑」、能戸幸「海見ゆる丘」、田辺三重松「海辺の午後(鹿部)」、古谷新太郎「支那人形」、池谷寅一「樹氷」、橋本三郎「未定」など。会員回顧作品では、山口潔、東政雄、前田政雄、笹野順太郎、能戸幸、田辺三重松、古谷新太郎、池谷寅一のほか、天馬正五郎「静物」、近岡外治郎「静物」、内山麓人(精一)「大沼小景」など。

昭和17年

この年道展に初めての日本画を出品している。この頃仕事の拠点は東京に移り、東京に居住し、さらに鎌倉市材木座1006(現 同3丁目)に別荘「一步寮」を構えている。函館と東京を行き来しながら、絵は鎌倉で描かれたのではないと思われる。

第18回道展は9月に開催され、酒谷小三郎は日本画「牡丹(三題)」を出品した。水墨画制作は昭和5年頃すでに知られていたが、日本画出品はこれが最初と考えられる。

3、「大聖寺古郷」時代の活動

昭和22年

この年から函館では北海道日本画院、東京では新しき村展覧会で活動した。昭和22年には道展改組会員に名を連ねているが、第18回以後作品の発表はない。

第1回新しき村展は5月に開催され、酒谷小三郎は日本画「南京絵皿」、「南瓜」を出品した。主な出品者と作品は野井十「風景」、武者小路実篤「自画像」、椿貞雄「椿花園」など。岸田劉生も特別陳列している。新しき

村は大正7年トルストイの人道主義に基づき、武者小路実篤を中心に全国から40余名が集まり、宮崎県児湯郡木城村石河内字城に建設された生活共同体の村である。昭和14年埼玉県入間郡毛呂山町に「東の村」を建設し、村展はここに集まった人達の展覧会である。酒谷小三郎が会員になった時期は今のところわからない。

第1回北海道日本画院展は6月に開催され、酒谷小三郎は出品しているが作品名は不詳である。北海道日本画院は昭和22年5月頃、函館の日本画家神保明世と酒谷小三郎が中心となって結成された。神保明世「水茶屋」。ほかに赤沢白翠、木原光俊、炭光任、炭和代の4人が出品した。酒谷小三郎は第1回展で酒谷、大聖寺どちらの画号で出品したか不詳である。

第2回北海道日本画院展は10月に開催され、酒谷小三郎は「静物」を出品した。神保明世「薫風」、赤沢白翠「迎夏」「秋涼」、炭光任「樹もれ陽」、山本蒼峽「秋趣」を出品し、植木蒼悦は作品名不詳である。

昭和23年

第3回道南日本画院展は10月に開催された。北海道日本画院から道南日本画院に名称変更しているが、展覧会開催の新聞記事は見当たらない。

昭和24年

第4回日本画院展は9月に開催された。道南日本画院から日本画院に名称変更している。酒谷小三郎は「鯉魚」を出品した。赤沢白翠「老松白鶴図」、炭光任「芽薯」、植木蒼悦「桃」、天間正五郎「斜陽」を出品した。18日の北海道新聞は「…水墨の雅境、東洋画の枯淡味も深く雅趣豊かな展覧会」と様子を伝えている。

昭和25年

第4回新しき村展は6月に開催され、酒谷小三郎は日本画「菊花」「梅花」、洋画「杓薬」「ばら」「港の秋」「沼の秋」「画室風景」を出品した。主な出品者と作品は椿貞雄「塩鮭」、野井十「自画像」、武者小路実篤「富士山」など。賛助出品には梅原龍三郎「鯛」などがある。

昭和26年

第5回日本画院展は9月に開催され、酒谷小三郎は出品しているが作品名は不詳である。赤沢白翠「薫風」「朝霞」、炭光任「静物」、宮林寿美「浜辺」を出品し、植木蒼悦は作品名不詳である。

昭和27年

この年東京で初めての個展を開催した。

第6回新しき村展は6月に開催され、会員出品として酒谷小三郎は「百日草の花」「椿の花」を出品した。主な出品者と作品は椿貞雄「牡丹花」、野井十「貯水池の小屋」など。賛助出品として梅原龍三郎「椿之図」、安井曾太郎「熱海風景」、武者小路実篤「裸婦」などがある。

大聖寺古郷個人展は東京で11月に開催された。出品した作品は油彩「海水浴」3点、「花」「大沼公園の秋」、日本画は「竹」「椿」「釣鐘草と金魚草」「釣鐘草」「芥子」「ばら」「K婦人像」「ぶどう」「苔むす石仏」2点、「裸婦」「籠中秋意」「南瓜とぶどう」「ぼたん」「雪中梅花」「ぼたん白描」の21点。本人は出品目録で「官展在野展から遠のいて二十数年になります。『新しき村美術展』が産れ住心地がよいこと、ここは無風地帯でありますが決して竹林の中ではなく、鋭い触覚と雑音を渡す立派な受信機を備え、画道場と云うばかりでなく超近代人道場である(略)小生の如き老画学生には分に過ぎた道場で、画事ひたむきで事足りるが個展開催は武田先生の再度

の御鞭撻により決心を立てた」と昭和4年以來の個展開催の決意を語っている。

昭和29年

函館で戦後初めての個展を開催した。函館では三回目の個展開催である。

第7回新しき村展は2月に開催され、酒谷小三郎は「仏像写」、「リンゴ」、「三宝柑」を出品した。主な出品者と作品は武者小路実篤「鏡のある静物」、椿貞雄「椿の図」、野井十「森田君の像」など。

函館での酒谷小三郎の個展は8月に開催された。出品した作品は油彩「静物」「風景」などの8点。北海道美術同好会主催で、4日の北海道新聞と5日の函館新聞は「万年画学生と自任する郷土画人大聖寺氏の高雅な画風は既に知られて居る所だが（略）武者小路実篤、椿貞雄氏等と『新しき村美術会』のトリオで毎年東京ではアンデパンダン式の会員のみので展覧会を開催し、梅原龍三郎、安井曾太郎氏なども参加して画壇の注目を集めている」と新しき村展覧会の事を紹介している。個展を開催した『コーヒー苑』は天間正五郎が経営していた店である⁽²⁴⁾。この頃喫茶店での個展は珍しかったようだ。

昭和30年

この年再び東京で個展を開催した。

第9回新しき村展は6月に開催され、洋画で酒谷小三郎は「ばらの花」を出品した。主な出品者と作品は椿貞雄「牡丹花」、野井十「大谷木風景」など。日本画は武者小路実篤「自然玄妙」など。

大聖寺古郷個人展は東京で7月に開催された。出品した作品は油彩「林檎」2点、「薔薇」4点、「牡丹」2点、「芍薬」2点、「花と裸婦」、「リラ咲く聖堂」、「立藤」、「菊」、「朝顔」、「金魚草」、水墨画は「栴」2点、「仏像写生」3点、「水仙」、「こぶし」の23点。

武者小路実篤は作品目録の挨拶で「大病前も大聖寺君は同君らしい風格のある油画、水墨画をもとの通り描いて居たが大病後はなほ真剣な気持ちで仕事をしているのに感心し、一進歩したのに僕達は喜んで」と病後なお意欲的に制作に打ち込んでいる姿を賞賛している。

昭和31年

第10回新しき村展は5月に開催され、酒谷小三郎は日本画「バラの図」を出品した。主な出品者と作品は武者小路実篤「自画像」、野井十「阿諏訪の耕地」、椿貞雄「夏蜜柑図」など。

昭和32年

第11回新しき村展は5月に開催された。酒谷小三郎は出品していない。

酒谷小三郎は6月20日に永眠したが、4ヵ月後の10月に故大聖寺古郷水墨画展が開催された。この開催は準備中であつた東京での4回目の個展が開催できなかったため、松坂屋が遺作展として開催した。

酒谷小三郎は武者小路実篤とは深い親交があり、酒谷小三郎葬儀の際には武者小路実篤が友人総代を務めた。雑誌「新しき村」9月号で野井十は追悼文の中で武者小路実篤の弔辞を紹介している。その弔辞が案内状に転載されている事から、遺作展開催には武者小路実篤など「新しき村」の仲間の尽力があつたと思われる。

おわりに

三つの画号と戦前・戦後の時代をキーワードに酒谷小三郎の画業の跡を辿ってみた。そこから見えるのは、酒谷家五代目として店主の責務を果し、生きる支えを生涯絵に求めた姿である。輝かしい画歴を持ちながら、「新しき村」の精神に共感し、ひたすら絵を描く

事に徹した生き方は画歴にも増して立派である。立証は出来なかったが、作風と画号との間には関連があると考えている。

三つの画号と酒谷小三郎にまつわるお話は酒谷雛子氏にご教示いただいた。お聞きしたお話は他の資料でも出来るだけ確認を取るようにした。また、北海道立函館美術館学芸員の穂積利明氏（当時）、大下智一氏に函館画壇に関する資料提供などご協力いただいた。大聖寺古郷関係資料は武者小路実篤記念館学芸員福島さとみ氏、学籍簿は加賀市立橋立小学校教頭井上恵子氏に提供していただいた。「古文書調査講座」の駒井麗子氏には展覧会目録を探していただいた。沢山の方々のご協力で発表することが出来たと思っている。また酒谷小三郎生誕百年に当る今年、掲載を企画され、指導をいただいた市立函館博物館学芸員の保科智治、霜村紀子両氏には大変お世話になり、お礼を申し上げたい。

不詳の部分も多く、これからも継続して調べてみたい。『酒谷家資料』の整理・解読の進展で、今後も新たな情報や調査の手掛かりが期待でき、東京紙や美術雑誌などからも情報が得られると思っている。生涯の制作作品数の把握や現存する作品数の調査も今後の課題としたい。

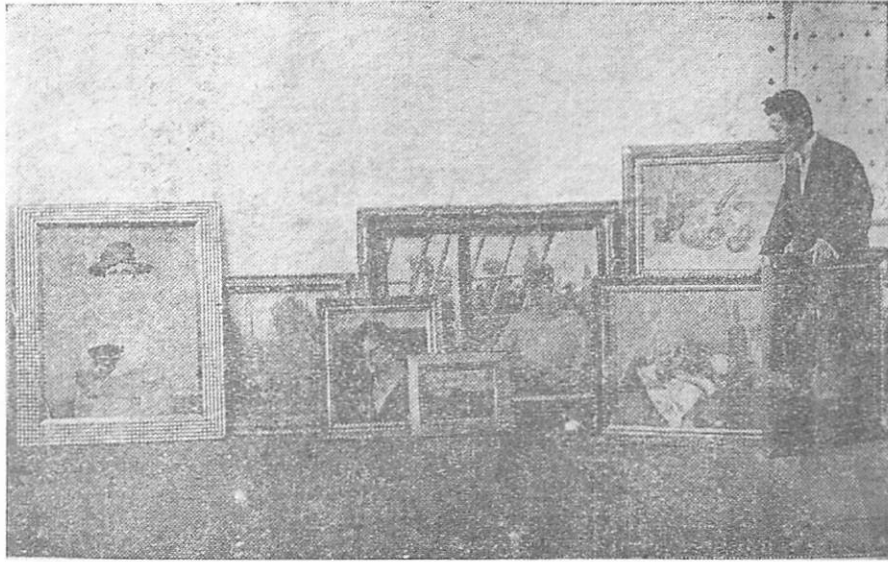
注記

- (1) 酒谷雛子氏のご教示による。
- (2) 「函館実業者便覧」「北海道実業人名録」（明治27年発行）、「函館案内」（明治35年発行）
- (3) 「尋常科卒業児童学籍簿」「退学児童学籍簿」
- (4) 卒業を証明する資料は今のところない。酒谷雛子氏によれば旧制小松中学校だが、旧制金沢中学校卒業という記事もある（大正15年10月12日「小樽新聞」）。
- (5) 「北海道実業大鑑」（大正15年発行）
- (6) 「函館名士録」（昭和11年発行）
- (7) 昭和32年6月25日「北海道新聞」
- (8) 大正15年10月12日「函館新聞」
- (9) 昭和29年8月5日「函館新聞」
- (10) 「第10回赤光社美術展覧会出品目録 赤光人素描」（昭和5年発行）
- (11) 大正15年10月12日「小樽新聞」
- (12) 「日展史7 帝展編二」（昭和57年発行）
- (13) 「日展史9 帝展編四」（昭和58年発行）
- (14) 大正15年10月12日「函館新聞」
- (15) 昭和2年9月19日「函館新聞」
- (16) 「箱館周辺の美術文化 赤光社50年記念」（昭和46年発行）
- (17) 昭和2年4月23日「函館新聞」
- (18) 昭和3年10月14日「函館毎日新聞」
- (19) 昭和3年10月21日「函館新聞」
- (20) 昭和4年11月22日「函館新聞」
- (21) (10) に同じ
- (22) 橋本三郎の両親は小塩出身で、芋（チガイヤマチヨウ）酒谷家の分家に婿入りした橋本五郎兵衛の一族と思われる。そのため橋本三郎と酒谷小三郎との間には交流があった。
- (23) (10) に同じ
- (24) 「北洋博記念号函館商工名鑑」（昭和29年発行）

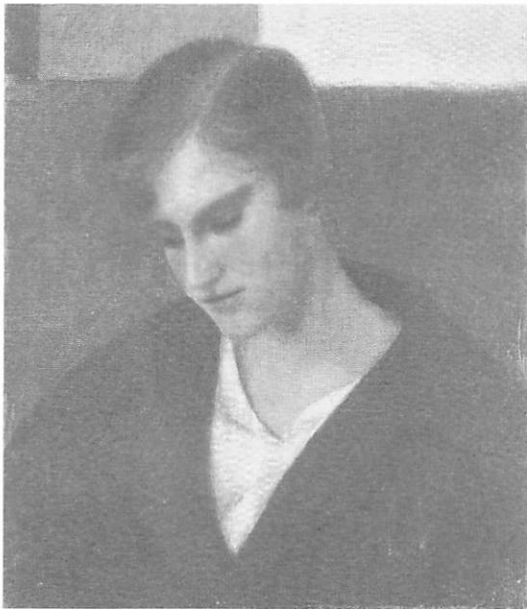
参考文献

- 「函館市史通説編第三巻」（函館市 平成9年発行）
「地域史研究 はこだて」第9号所収「大正期の函館洋画壇の成立とその周辺—赤光社創立をめぐって」大熊敏之（函館市 平成元年発行）
「地域史研究 はこだて」第18号所収「昭和戦前期の函館の画壇—その諸相と展開」大熊敏之（函館市 平成5年発行）
「北海道美術史」（北海道立美術館 昭和45年発行）

全函館畫家作品の搬入



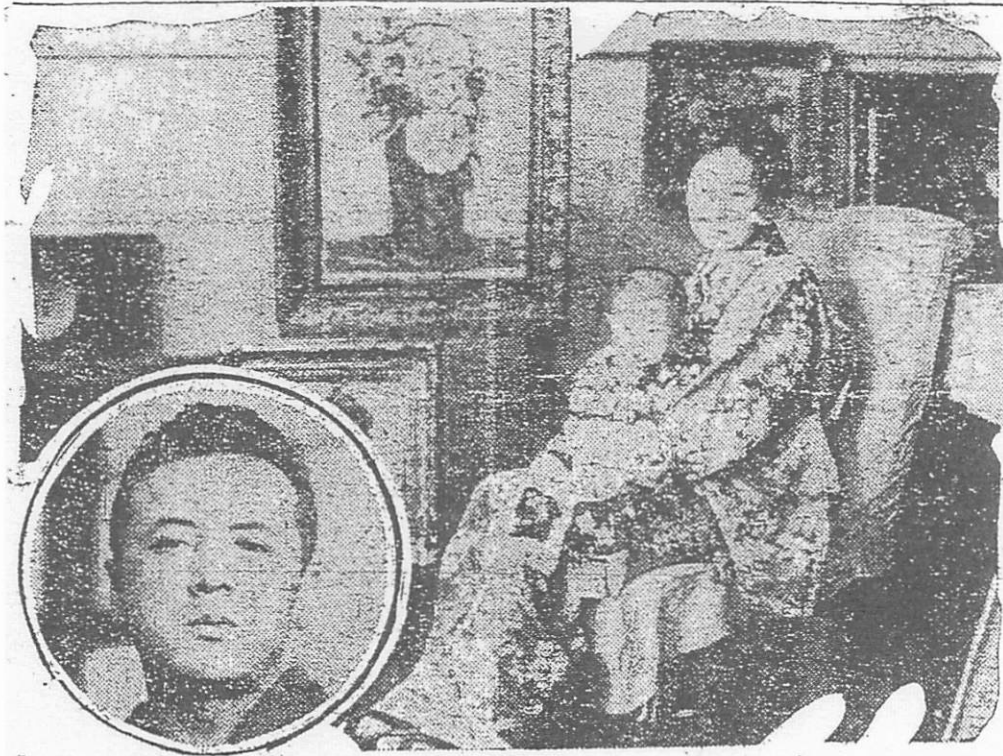
大正12年10月4日 函館新聞
左から3番目が「西洋婦人像」と思われる作品



西洋婦人像
北海道立函館美術館蔵



花
大正15年 第7回帝展出品
『日展史7』より
(社団法人日展提供)



山洋荘に

匂ひ咲く花

同じ繪筆に趣味をもつ夫人
 店の方は支配人にまかせて

精進する酒谷さん

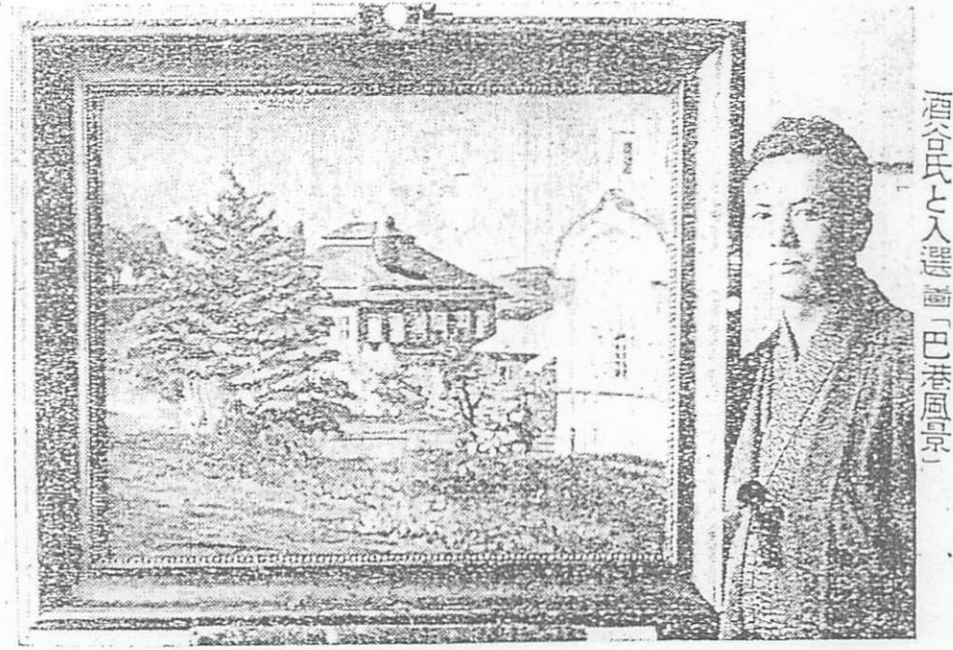
製作品花を帝野洋畫部に出して
 入選した函館 畫家酒谷小三郎氏
 は船見町の高豪、函館港内を一目
 に見おろされる所に立派なアトリ
 エを持つてゐる。山洋荘といふの
 はこのアトリエの事で、主人公小
 三郎氏は西濱町の店の方を支配人
 や夫人綾子さんに委せて、自分で
 は終日この山洋荘に籠つて繪筆を
 とつてゐる。

函館の畫家連からも常に尊敬され
 道展の審査員となつてゐるところ
 からしても好加減な道を進つてゐ
 る人でないことがうなづかれる。
 殊に夫人綾子さんがまた非常にこ
 の道を愛し、自らカンバスに對ふ
 こともあるし時には畫評を新聞に

書いたりすることもある。今春兩
 人の間には離れ子さんといふ可愛ら
 しいお嬢さんが出てきて、蜜のやう
 な生活が一層こまやかになつたと
 「ことしは目出たいことこれで
 二度です。何事も三度といひます
 から今度こそは價券でも當るか知
 れませんね。」と常に言葉の少さう
 な氏が戯談を言ひながら喜びを包
 みきれなさうな表情で笑ふ。

夫人とは洋畫が取持つ縁ともい
 れその間に美しいロマンスを導
 へる連中もあるが「この山洋荘は私
 だけの居城です。家内も来ない
 様にしてゐます」と語り専ら斯道
 に精進してゐるらしい面白い色を見
 せてゐた。(寫眞は酒谷氏と入選
 畫「花」を前にした夫人綾子さん)

大正15年10月13日 小樽新聞



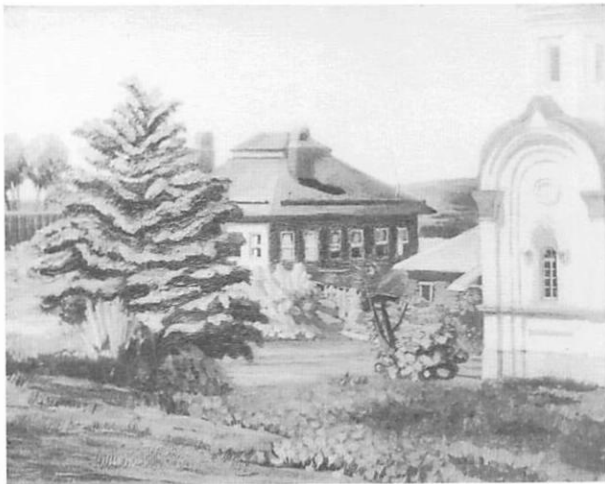
酒谷氏と入選画「巴港風景」

酒谷氏の入選画
「巴港」
風景「賣約濟

賣價金五百圓也

帝展事務所から通知来る

第九回の帝展出品として入選の榮を得た船見町酒谷小三郎氏の入選画「巴港風景」(大きさ三尺に二尺四寸三十號)は男爵藤田氏の命で藤田徳太郎氏との間に金五百圓で賣約所となつた旨展覧會事務所から酒谷氏まで通知があつたさうである



巴港風景
昭和3年 第9回帝展出品
『日展史8』より(社団法人日展提供)

昭和3年10月21日 函館新聞



アトリエ山洋荘にて 家族と
昭和3、4年頃（酒谷雛子氏蔵）
左からモデル、酒谷小三郎、娘・雛子、妻・綾子



あすから大聖寺
古郷氏の個展
恵比須町コーヒー苑で
北海道美術回好会主催で明五日か
ら十一日まで市内恵比須町コーヒ

「苑で大聖寺古郷氏の油彩小品展
が催される

大聖寺古郷氏とは市内西浜町昭
栄石油会社並にワチガイ印刷谷
商社の社長酒谷小三郎氏の画号
で、武者小路実篤、樺島雄氏等

と「新らしき
村美術会」の
トリオで毎年
東京ではアン
デパンタン式
の会員のみ
の展覧会を定期
的に開催し、
梅原龍三郎、
安井曾太郎氏
なども参加し
て画壇の注目を
集めている
Ⅱ写真は岡家
の酒谷小三郎
氏Ⅱ

昭和29年8月5日 函館新聞

戦前の作品

会期	展覧会名	会場	出品	作品	典拠資料
大正11. 10. 15～17	第三回赤光社美術展覧会	函館・海産商同業組合事務所	黒田 山洋 洋画	『静物』外1点	10. 14 [函館新聞] 10. 15 [函館毎日新聞]
12. 9. 9～11	第四回赤光社美術展覧会	函館・公会堂	黒田 山洋 洋画	『人物』3点『静物』	「赤光社第四回絵画展覧会陳列製作品目録」
10. 5～9	震災義捐全函館絵画展覧会	函館・公会堂	黒田 山洋 洋画	『人物』3点『静物』	「震災義捐全函館絵画展覧会陳列製作品目録」 10. 3 [函館新聞] 10. 4 [函館新聞] 10. 8 [函館毎日新聞]
13. 9. 21～23	第五回赤光社美術展覧会	函館・公会堂	黒田 山洋 油絵	『風景』2点『静物』	「赤光社第五回展覧会目録」 9. 19 [函館新聞] 9. 21 [函館毎日新聞]
14. 不詳	第六回赤光社美術展覧会	不詳	不詳	不詳	
10. 5～18	第一回北海道美術協会展覧会	札幌・農業館	黒田 山洋 油絵	『田尻川の景』『加州片山津温泉湯本の景』	「道展四十年史 総目録」 10. 5 [函館新聞]
10. 31～11. 1	函館商業学校洋画展覧会	函館・商業学校	黒田 山洋	不詳	11. 1 [函館毎日新聞]
15. 4. 8～9	第一回ゼラニウム会洋画小品展覧会	函館・公会堂	黒田 山洋	『未定』	「ゼラニウム会洋画小品展覧会目録」 4. 9 [函館新聞]
6. 10～13	第七回赤光社美術展覧会	函館・公会堂	黒田 山洋	『裸婦沐浴』	6. 10 [函館毎日新聞] 6. 13 [函館新聞]
9. 1～17	第二回北海道美術協会展覧会	札幌・農業館	黒田 山洋 油絵	『諸果』	「道展四十年史 総目録」 10. 25 [函館新聞]
10. 16～20	第七回帝国美術院展覧会	上野・東京府美術館	酒谷小三郎 油彩	『花』	「日展史7(帝展編2)」 10. 12 [小樽新聞] [函館新聞] [函館毎日新聞]
10. 30～11. 1	函館美術展覧会	函館・公会堂	酒谷小三郎 油彩	『花』(帝展入選作品)	10. 24 [函館毎日新聞] 10. 31 [函館新聞]
昭和2. 3. 12～14	酒谷氏の洋画個展	函館・丸井今井	酒谷小三郎	『裸婦』6点『静物』6点 『花』6点『風景』5点 『舞子』『赤きボーンシの女』 『グラス持つT氏』『O氏像』 『自画像』『曲馬団』『曲馬団の楽屋』『娘剣舞』 『ルイ朝式椅子のある静物』 合計32点。特別陳列10点	「酒谷小三郎作品目録」 3. 13 [函館新聞] 3. 14 [函館新聞]
4. 23～5. 15	第五回春陽会美術展覧会	上野・東京府美術館	酒谷小三郎 油彩	『東京娘剣舞』	4. 23 [函館新聞]

会期	展覧会名	会場	出品	作品	典拠資料
昭和2. 6. 23~7. 3	洋画小品展 (赤光社同人)	函館・極光社書店	酒谷小三郎	「風景」「花籠」「静物」	6. 24 [函館新聞]
7. 20~25	第八回赤光社美術展覧会	函館・樺二森屋	酒谷小三郎	「風景」「お化粧」「花」「或るポーズ」「曲馬団」	「第八回赤光社展覧会目録」 7. 21 [函館新聞]
9. 4~20	第三回北海道美術協会展覧会	札幌・農業館	酒谷小三郎	洋画 「雑妓」「裸婦」「ガンガ ン寺風景」2点	「道展四十年史 総目録」 9. 10 [函館新聞]
昭和3. 9. 9~23	第四回北海道美術協会展覧会	札幌・農業館	酒谷小三郎	油彩 「東京娘剣舞」(春陽会入 選作)「菊花」「宵祭総場 戯彩」	「道展四十年史 総目録」 9. 9 [函館新聞]
10. 16~20	第九回帝国美術院展覧会	上野・東京府美術館	酒谷小三郎	洋画 「巴港風景」	「日展史8(帝展編三)」 10. 13 [小樽新聞] 10. 14 [函館毎日新聞] 10. 21 [函館新聞]
11. 16~18	第九回赤光社美術展覧会	函館・樺二森屋	酒谷小三郎	「大夫」「雑妓」「村芝居」	「赤光社第九回展覧会出品目 録」 11. 16 [函館新聞]
4. 3. 16~4. 4	第六回槐樹社展覧会	上野・東京府美術館	酒谷小三郎	「ポブラ」	「槐樹社展覧会出品目録」
7. 27~8. 4	第五回太地社美術展覧会	小樽・公会堂	酒谷小三郎	「魚の静物」	7. 27 [小樽新聞]
9. 5~23	第五回北海道美術協会展覧会	札幌・農業館	酒谷小三郎	油絵 「静物」	「道展四十年史 総目録」
10. 13~17	第一回函館美術協会展覧会	函館・市民館	酒谷小三郎	洋画 「風景」	10. 13 [函館毎日新聞] 10. 15 [函館新聞]
11. 21~24	酒谷小三郎氏個人展	函館・市民館	酒谷小三郎	洋画 「裸婦」8点「聖堂の辺」 6点「花」6点「静物」3 点「子供」2点「M子」 「T子」「大夫」「ポブラ」 「村芝居」合計30点 不詳	「酒谷小三郎洋画作品個人展 覧会目録」 11. 20 [函館新聞] 11. 22 [函館新聞] 11. 23 [函館毎日新聞] 6. 26 [小樽新聞] [北海タイムス]
10. 6. 26~30	第一回北海道新作美術協会展覧会	札幌・三越	酒谷小三郎		
15. 11. 9~13	第十七回赤光社美術展覧会	函館・丸井今井	酒谷小三郎	「静物」(大正末期作)	「第十七回赤光社美術展覧会 出品目録」
17. 9. 9~17	第十八回北海道美術協会展覧会	札幌・丸井今井	酒谷小三郎	「牡丹(三題)」	「道展四十年史 総目録」

戦後の作品

会期	展覧会名	会場	出品	作品	典拠資料
昭和22. 5. 23～30	第一回新しき村美術展覧会	上野・東京都美術館	酒谷 古郷 日本画	「南京絵皿」「南瓜」	「第一回新しき村美術展覧会目録」
6. 20～26	第一回北海道日本画院展覧会 (同人展)	函館・樺二森屋	不詳	不詳	6. 17 「函館新聞」
10. 1～10	第二回北海道日本画院展覧会 (第一回公募展)	函館・樺二森屋	大聖寺古郷	「静物」	10. 2 「北海道新聞」
23. 7. 6～20	第三回新しき村美術展覧会	上野・東京都美術館	不詳	不詳	「新しき村満三十年記念展覧会案内はがき」
10. 12～18	第三回道南日本画院展覧会 (第二回公募展)	函館・樺二森屋	不詳	不詳	9. 25 「北海道新聞」
24. 5. 10～15	第三回新しき村美術展覧会	銀座・三越	不詳	不詳	「新しき村第三回美術展覧案内はがき」「神奈川近代文学館収蔵文庫目録9 中川 孝収集実篤文庫目録」
9. 17～25	第四回日本画院展覧会(同人展)	函館・樺二森屋	大聖寺古郷	「鯉魚」	5. 11 「朝日新聞」
25. 6. 6～11	第四回新しき村美術展覧会	銀座・三越	大聖寺古郷 大聖寺古郷	日本画 洋画 「梅花」「芍薬」「画室風景」 「ばら」「杓薬」「沼の秋」	9. 18 「北海道新聞」 「第四回新しき村美術展覧会目録」 「実篤文庫目録」
26. 9. 12～16	第五回日本画院展覧会	函館・樺二森屋	大聖寺古郷	不詳	9. 11 「函館新聞」 9. 14 「北海道新聞」
不詳	第五回新しき村美術展覧会	不詳	不詳	不詳	
27. 6. 24～29	第六回新しき村美術展覧会	日本橋・三越	大聖寺古郷	「椿の花」「百日草の花」	「新しき村第六回美術展覧会目録」「実篤文庫目録」
11. 8～14	大聖寺古郷個人展	上野・松坂屋	油彩 日本画	「海水浴」3点「花」「大沼公園の秋」 「釣鐘草と金魚草」「竹」「釣鐘草」「芥子」「椿」「ばら」 「苔むす石仏」2点「ぶどう」 「K婦人像」「籠中秋意」「雪中梅花」「ぼたん」「ぼたん白描」「南瓜とぶどう」「裸婦」 合計21点	「大聖寺古郷個人展出品目録」
29. 2. 16～21	第七回新しき村美術展覧会	日本橋・三越	大聖寺古郷	「仏像写」「リンゴ」「三宝柑」	「第七回新しき村美術展覧会目録」
8. 5～11	大聖寺古郷油彩小品展	函館・コーヒー苑	大聖寺古郷	油彩	8. 4 「北海道新聞」
不詳	第八回新しき村美術展覧会	不詳	不詳	不詳	

会期	展覧会名	会場	出品	作品	典拠資料
昭和30. 6. 14～19	第九回新しき村美術展覧会	日本橋・三越	大聖寺古郷 洋画	『ばらの花』	「第九回新しき村美術展覧会目録」 「実篤文庫目録」
7. 8～14	大聖寺古郷個人展	銀座・松坂屋	油彩	『林橋』2点 『薔薇』4点 『牡丹』2点 『芍薬』2点 『リラ咲く聖堂』 『金魚草』 『花と裸婦』 『立藤』 『菊』 『朝顔』 水墨画	6. 10 「朝日新聞」 「大聖寺古郷個人展作品目録」
31. 5. 15～20	第十回新しき村美術展	日本橋・三越	大聖寺古郷 日本画	『バラの図』	「第十回新しき村美術展覧会目録」 「実篤文庫目録」
不詳	大聖寺古郷個人展	上野・松坂屋	不詳	不詳	
32. 5. 21～26	第十一回新しき村美術展	日本橋・三越	出品していない		「第十一回新しき村美術展覧会目録」
5. 不詳	大聖寺古郷個人展	京橋・南画廊	不詳	不詳	
10. 22～27	故大聖寺古郷水墨画展	上野・松坂屋	不詳	不詳	「故大聖寺古郷水墨画展案内」
33. 10. 21～26	第十二回新しき村美術展覧会	日本橋・三越	不詳	不詳	「第十二回新しき村美術展覧会目録」
11. 12～14	赤光社第35周年記念物故作家遺作展	函館・商工会議所	不詳	不詳	11. 21 「北海道新聞」
34. 6. 16～21	函館洋画史展	函館・丸井今井	酒谷小三郎 日本画	『梅』	「函館洋画史展出品目録」
46. 10. 12～17	赤光社50周年記念絵画史展	函館・樺二森屋	酒谷小三郎 水墨画	『作品A』 『作品B』	
53. 11. 9～14	赤光社第55回記念回顧展	函館・和光	酒谷小三郎 洋画	『裸婦』 『自画像』	「1971箱館周辺の美術文化 赤光社50周年記念」 「赤光社美術協会第55回記念 図録」
平成5. 3. 7～28	赤光社創立から現代まで 昭和の函館画壇	函館・函館美術館	酒谷小三郎 洋画	『西洋婦人像』 『時計のある静物』 『裸婦』	11. 10 「北海道新聞」 「赤光社創立から現代まで 昭和の函館画壇」図録
6. 1. 22～3. 27	道南の美術 戦前洋画の歩み	函館・函館美術館	酒谷小三郎 洋画	『西洋婦人像』 『裸婦座像』 『時計のある静物』	「道南の美術 戦前洋画の歩 み」図録
15. 1. 19～3. 23	青春の洋画一戦前までの道南美術	函館・函館美術館	酒谷小三郎 洋画	『時計のある静物』 『西洋婦人像』	「青春の洋画一戦前までの道 南美術出品目録」
2. 1～14	あーとふる・ほこだて	函館・芸術ホール	酒谷小三郎 洋画	『卓上静物』	「あーとふる・ほこだて出品 目録」

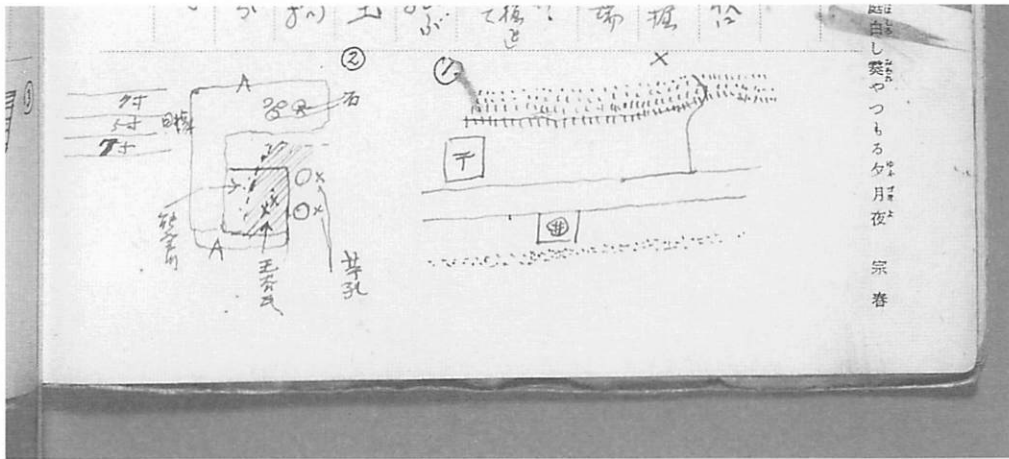


図13

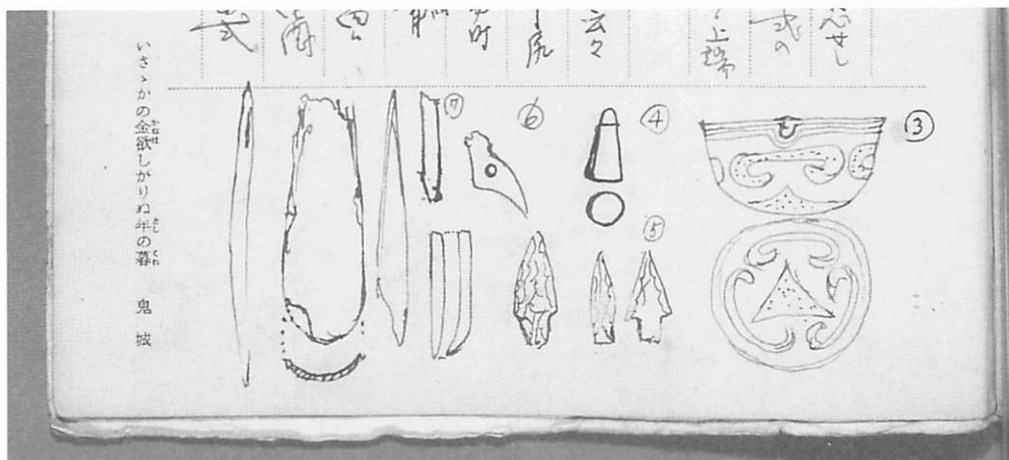


図14

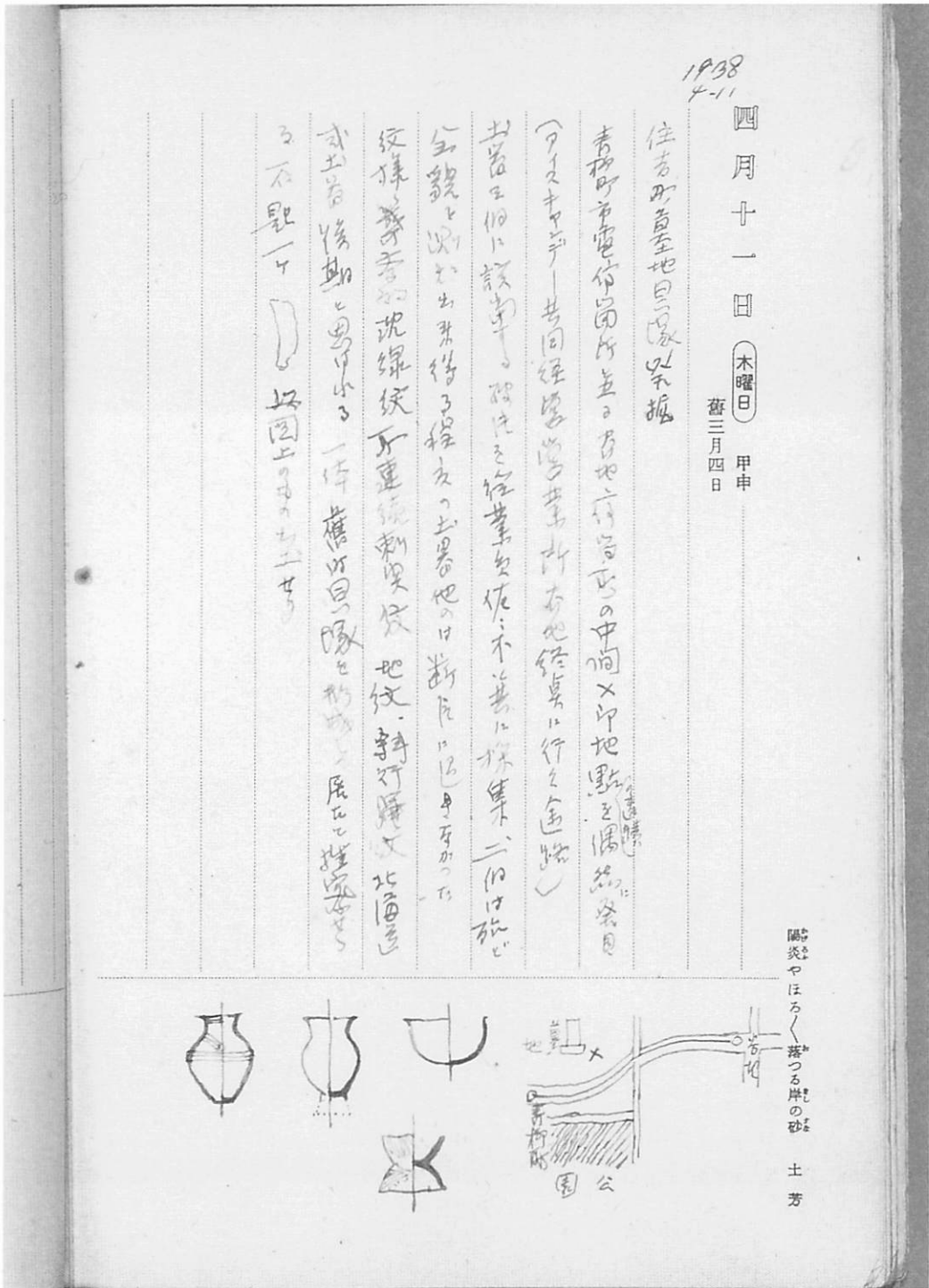


図12

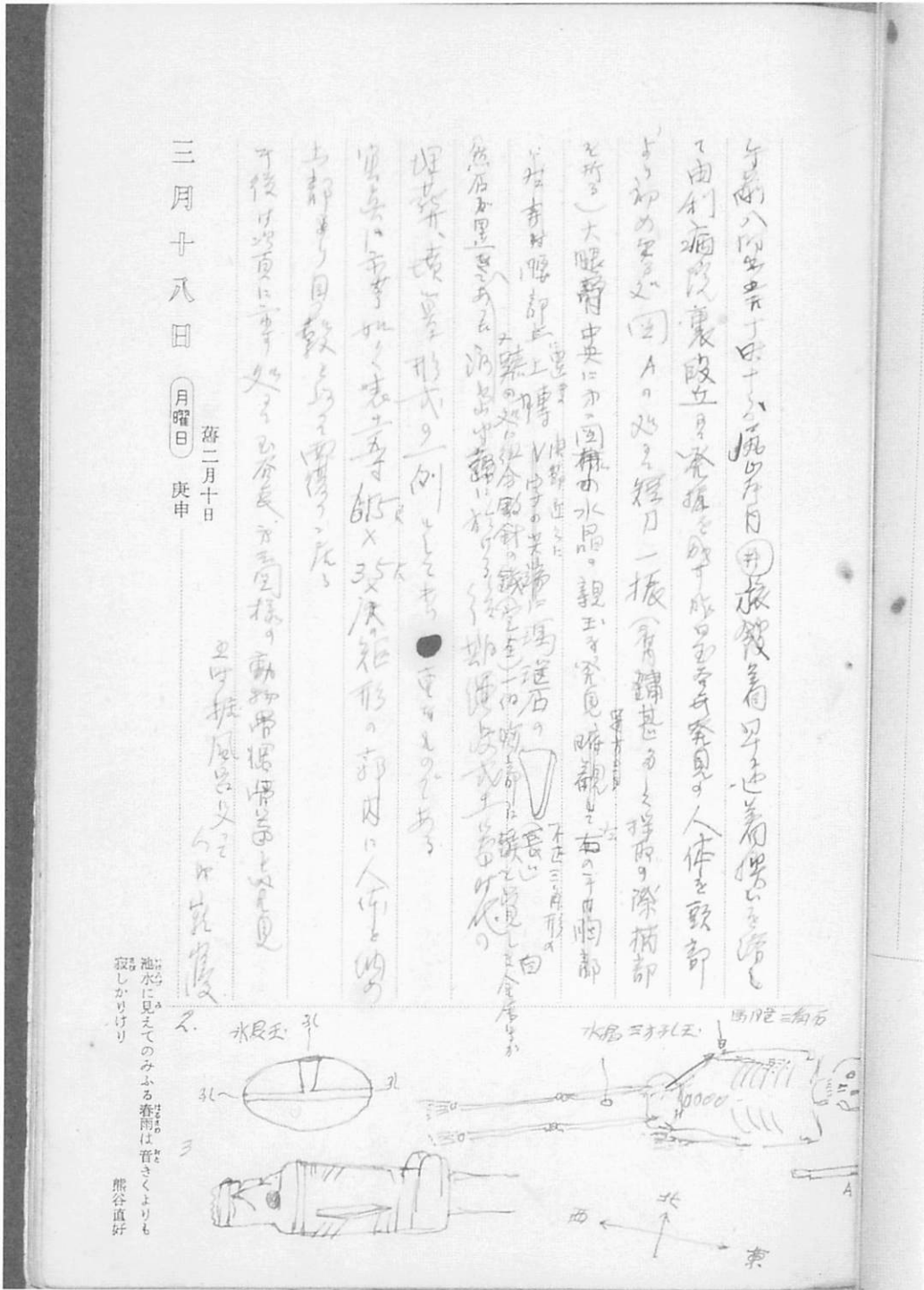


図10

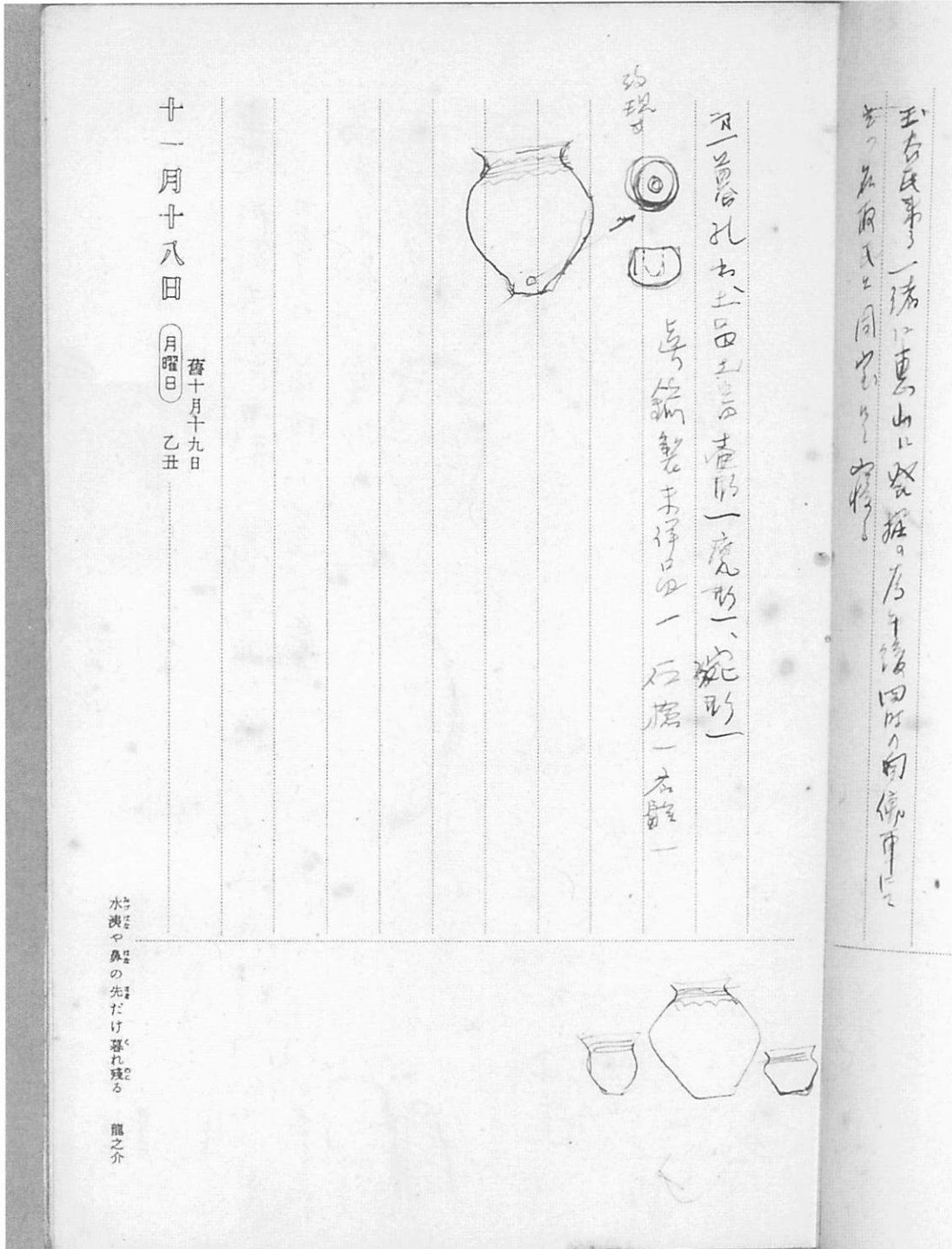


図7

山内 清男

一九四〇

横山 哲三郎

一九三三

〔日本先史土器図譜〕 第五輯 先史考古学会、東京

〔釜山府絶影島東三洞貝塚報告〕 繩紋式系統の朝鮮大陸との関係 〔史前学雑誌〕 第五卷第四号 1-49頁

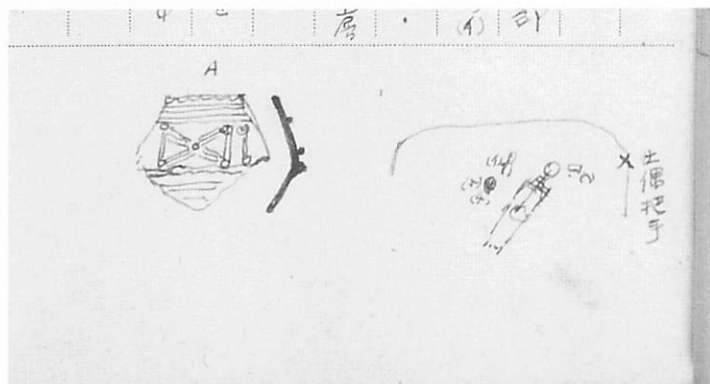


図4

友等について御教示いただいたことを特に記して感謝したい。

また能登川氏の研究資料の閲覧・調査を許可され、紀要への執筆を認めていただいた市立函館博物館に深謝したい。調査と執筆にあたっては同館の長谷部一弘氏（平成十五年度当時）、中村公宣氏、霜村紀子氏に大変お世話になった。

日記写真の複写刊行については北海道教育委員会の許可を得、文献調査は主に北海道立理蔵文化財センター、北海道立図書館、札幌市中央図書館の蔵書に頼った。さらに本稿執筆について次の方々に御援助賜ったことを記して御礼申上げたい。

大沼 忠春 畑 宏明 守屋 豊人
(北海道教育委員会文化課)

引用文献

赤松 啓介
一九三六 『東洋古代史講話』 白揚社、東京

クローゼ(安藤 弘 訳)
一九三六 『芸術の起源』 岩波書店、東京

ゴオガン、ポオル(前川 堅市 訳)
一九三二 『ア・ノア』 岩波書店、東京

国立歴史民俗博物館 編
二〇〇一 『総合計業縄文時代遺物コレクション②同館資料図録1』 同館

河野 広道
一九五九 『北海道出土の環状石斧』 『アイヌ・モシリ』 第4号 1頁～10頁

犀川会 編
一九七七 『北海道原始文化聚英』 (復刻) 北海道出版企画センター

財団法人北海道埋蔵文化財センター 編
二〇〇四 『恵山町恵山貝塚』 重要遺跡確認調査報告書第4集 北海道立理蔵文化財センター

佐藤 智雄
タ

二〇〇一 『能登川コレクションの恵山式土器について』 『市立函館博物館研究紀要』 第11号 21～42頁

佐藤 智雄・五十嵐 貴久
一九九六 『能登川コレクションの骨角器について』 『市立函館博物館研究紀要』 第6号 1～32頁

尻岸内町々史編さん委員会 編
一九七〇 『尻岸内町史』 尻岸内町役場

市立函館博物館 編
一九五九 『能登川コレクションと古代文化展』 (パンフレット) 同館

一九九四 『市立函館博物館蔵品目録』 7 考古資料編4 同館

『ドルメン』 編輯部 編
一九三五 『日本石器時代の遺跡と遺物』 『ドルメン』 第四巻第六号

名取 武光
一九六〇 『網と釣の覚書』 『北方文化研究報告』 第15輯 141～205頁

バチエラ、ジエー(河合 禎石 訳)
一九二五 『アイヌの伊辺物語』 富貴堂書房、札幌

馬場 脩
一九二七 『北千島樺太の考古学的調査』 『考古学雑誌』 第27巻第11号 780～782頁

馬場 脩・江上 波夫・後藤 守一・伊東 信雄・喜田 貞吉・三上 次男・山内 清男・八幡 一郎・甲野 勇
一九二六 『座談会 北海道・千島・樺太の古代文化を検討する 古代北方文化の構造と系統』 『ミネルヴァ』 第一巻第五、七、八号 195～208、295～300、347～352頁

深瀬 春一
一九二六 『蝦夷地に於ける和人伝説攷』 間瀬印刷所、函館

フレイザー(水橋卓介訳)
一九二九 『サイキス・タスク』 (俗信と社会制度) 岩波書店、東京

マトリン 編(早川 二郎 訳)
一九三五 『原始共産社会』 白揚社出版、東京

漢岡伸一
一九二四 『アイヌの足跡』 真正堂、白老

さて多岐にわたる日記の記事のうち、能登川コレクションの今後の活用に関して重要な意味をもつと考えられる内容について、蛇足とは思いますが多少説明しておきたい。

最も重要と思われるのは、最初にも述べたように昭和十五年十一月の名取氏との発掘がこの日記に記録されており、その際の出土品が能登川コレクションの中に含まれているという事実である。すでに重要遺跡確認調査の報告書で検討したので(財団道埋文編二〇〇四のⅢ章)詳細は省くが、日記第21頁本文「第一墓孔」は名取氏の「第9号墳墓」とみて問題なく、また第22頁「第一孔」が「第8号」、第22頁「第二孔」が「第19号」、第23頁「第二孔墓」が「第7号墳墓」に相当する可能性が認められる。そしてこれらの「墳墓」出土遺物の少なくとも一部は市立博物館の藏品となっているものと考えられる。出土品が札幌と函館とに分かれて保管された経緯は今となっては知る由もないが、第44頁本文に見えるように、おそらく共同調査後の能登川氏は名取氏らに対してある種の不信感を抱いていたようでもある。いずれにせよこの資料の分散が、昭和十五年十一月の発掘が二十年の間未報告のまま放置された原因の一つであったに違いない。名取氏が発掘後間もない時期にまとめていたと考えられる略報「恵山貝塚の墳墓」を公表するのはようやく昭和三十四年度の末であり(名取一九六〇)、それは能登川氏の収集品が市立博物館に寄贈され、共同調査の発掘品を北大で一括保存する可能性がほぼ断られた直後のことなのであった。こうした幸福とは言えない経緯にもかかわらず、名取氏が具体的に触れていない遺構内での遺物の出土状況が能登川氏の記録を通じてある程度明らかになったことを喜ぶべきであろう。今後津軽海峡沿岸で保存状態のよい縄文式の墳墓遺跡が調査されることはそれほど期待できないと思われる今日、この記録が道南地方の葬制の研究のために持つ意義は小さくないように思われる。

次に、日記に記載された遺物のいくつかが現存する能登川コレクション中の遺物に同定でき、その出土の日時や場所が判明する点が重要である。例えば市立函館博物館の目録番号971の熊頭形の彫刻のある鹿角製品(市立函館博物館編一九九四の図版143、佐藤・五十嵐一九九六の写真図版9)は昭和十三年十月十九日に斜

面中段の貝塚から出土したこと(第3頁脚注)、また目録番号947の鯨?形の裝飾がある鹿角製品(市立函館博物館編一九九四の図版138、佐藤・五十嵐一九九六の図7の262)は昭和十三年四月五日午前(玉谷氏が発掘したこと(第46頁本文)、さらに目録番号917、尖端のある環状石斧(市立函館博物館編一九九四の図版133)は昭和十三年四月七日に「貝塚底部」から出土した破片(第46頁本文)と昭和十二年十一月十八日に「中段」から発掘した尖端部が接合したものであること(第52頁本文)などを知ることができる。

最後に、能登川コレクションは恵山貝塚出土品として一括できるわけではなく、複数の遺跡に由来することが判明した点を指摘しておきたい。二三の例を挙げれば、市立函館博物館の目録番号945の動物上半身形の裝飾がついた鹿角製品(市立函館博物館編一九九四の図版139、佐藤・五十嵐一九九六の図7の260)は旧般法華村の浜町砂丘遺跡でおそらく昭和十四年十月十八日に発掘されたこと(第3頁本文)、目録番号949の骨製品(市立函館博物館編一九九四の図版151、佐藤・五十嵐一九九六の図7の266)は昭和十六年?三月十九日に大淵遺跡で玉谷氏が発掘したこと(第42頁本文)、尖端に再加工のある鹿角製品(佐藤・五十嵐一九九六の図1の18)はやはり玉谷氏が大淵遺跡で昭和十三年十二月十九日に発見したこと(第73頁本文および第75頁本文・脚注)などが日記の記事からほぼ明らかになった。

おわりに

以上要領を得ない文章ながら、能登川氏の研究資料が著名なコレクションの成立過程について、また草創期の北海道考古学の側面についてかけがえのない記録であることは伝えることができたものと考えられる。今回あまり紹介できなかった手帳ほかの資料についても、今後の詳しい検討によって貴重な情報を引き出すことがおそらく可能であろう。

文末になったが、能登川氏の孫で現在山形県真室川町に在住の深野せき子氏には日記の公表に御同意をいただき、あわせて能登川氏の経歴、玉谷氏との交

本文)

ネ 不明年十月十八日、般法華湾中貝塚 (第3頁本文)

ナ ネと同年十月二十八日、般法華 (第5頁本文・脚注)

このうち尻岸内で人骨を発掘したレッシュツの調査は、第44頁本文の記事から恵山で人骨を掘った後のものであることがわかる。その人骨が第47頁本文に記述された口の調査で出土したものであるならレッシュツは昭和十四年以降のもの、また恵山人骨が「墳墓」の発見があったワまたは力の調査によるものならレッシュツは昭和十五年以降ということになる。またネ・ナは月日の重複から昭和十三年ではないことが明らかである。

ここで元の一冊の日記帳からどの日付の頁が抜粋され、どのような順に綴られているか、前節で紹介しなかったページを含めて見てみよう。レッシュツの発掘記事の位置も示しておく。

第1・2頁	七月十八・十九日	
第3・4頁	十月十八・十九日	ネ
第5・6頁	十月二十八・二十九日	ナ
第7頁	歳時記、一月一日～一月十一日	
第19頁	十一月十六日～二十一日	
第25頁	十一月二十八日～十二月一日	
第31頁	二月十七日～二十日	
第35・36頁	三月二・三日	
第37・38頁	三月六・七日	
第39・40頁	三月十・十一日	
第41頁	三月十八～二十一日	レッシュツ
第45頁	四月四～七日	
第49頁	四月十～十七日	
第57頁	十二月八～二十九日	
第79・80頁	日付なし(予備欄)	

このように現在の日記はそれぞれ月日の順に配列された第1～6頁、第7頁

30頁、第31頁以降という三つの部分から構成されている。もしこの三部分が三箇年を表し、名取氏との発掘記事を含む第二部が昭和十五年を示すなら、第一部が昭和十四年、第三部が昭和十六年に当たるという可能性が一応考えられよう。第二部の第12頁の冒頭に「15.17」、また第三部の第38頁の冒頭に「19.10」、第77頁冒頭には「15.12.24」という年次の記入があつて、昭和十五年の日記帳に十六年以降も記入を続けたことの反映であるように思われる。なお第一部に昭和十三年、第二部に昭和十四年、第三部に昭和十二～十五年の記事が含まれているのは、日記帳の製本の折りを保存しながら抜粋・編纂がなされ、複数年の記事を含む折りは新しい年次を尊重して綴られた結果として説明できるのであるまいか。

このほか一節で触れた日記以外の資料には、次のような調査の日付が見られる。

ラ	昭和十年十二月十八日(水)、恵山(スクラップブック)
ム	昭和十一年六月七日(月)、恵山(スクラップブック)
ウ	昭和十二年三月十八日(木)、恵山(スクラップブック)
キ	昭和十二年六月十九日(土)、恵山(スクラップブック)
ノ	昭和十二年十月九日(土)、恵山(スクラップブック)
オ	昭和十四年四月七(金)、八日(土)、恵山か(手帳)
ク	昭和十五年十一月二十四日(日)、函館市湯の沢(手帳)

ただしラ～クは遺物の出土日付と思われるものが記入されるだけで、能登川氏本人が現地へ赴いたかどうか不明である。

以上のように能登川氏の現地調査は早ければ昭和十年ごろから昭和十五年、あるいは十六年以降までの間に確認できる範囲でも二十数回を数え、特に昭和十三年には盛夏と積雪期を除いて恵山に通いつめる状況であつたことがわかる。経営の合間を縫つての調査行であり、自宅では出土品の整理が続いたことを考えれば「趣味の土器いじりには、ずい分苦勞させられました。(略)出土品の良否が毎日の照る日曇る日」(市立函館博物館編一九五九)という米子夫人の回想は決して誇張ではなかつたであらう。

- 三 「二貫」の上に「経路を」と書いて縦線で抹消し、右脇に「変化を示し乍ら」と書き添える。
 四 「縦走」の右脇に「径成過程」と書き添える。
 五 「南」は不明の一字に上書きする。

第80頁 日付なし(十二月末) 本文

北海道は狐の産地として知られて居る。アイヌは狐をチロンノブ或はフリーレップと呼び其毛色によつて斑黒狐白狐赤狐等の名がある 和人伝説攷⁹⁰

深瀬

狐のうちでも黒いものはシトムベカムイ(神の悪漢)と呼ばれ最も尊敬される、

アイヌ炉辺物語ジョンハチエラー

アイヌの伝説中に彼等の祖先が動物であるといひ伝へて居るものが少なくない例へば石狩川上流泥川、旭川近文等のアイヌはレブンカムイ(鱈又はイルカ)の子孫十勝ケネ部落のアイヌは鮭の後裔 石狩国ベベツ後志国岩内のアイヌは熊の子孫北見ユベツツアイヌは狐の子孫等といふが如くである

注一 一・二行目は深瀬春一の著書『蝦夷地に於ける和人伝説攷』(深瀬一九三六) 90頁からの引用である。

二 二行目は『蝦夷地に於ける和人伝説攷』96頁からの抄録。そこにJ. Bachelderの *Ainu Friends* (1923)を和訳した『アイヌの炉辺物語』の内容(パチエラー一九三五の61頁)が引用されてい⁹⁰。

三 日記に見る能登川氏の調査

前節で紹介した日記の内容によって確かめうる範囲で、能登川氏と玉谷氏の現地調査を時間の順に配列すると、以下のようになると思われる。

- イ 昭和十二年十一月十八日(木)、恵山(第52頁本文)
 口 昭和十三年四月五(火)〜七日(木)、恵山、玉谷氏と(第46、52頁本文)
 ハ 昭和十三年四月十一日(月)、住吉町貝塚(第50頁本文・脚注)

二 昭和十三年四月十七(日)、十九日(火)、恵山(第55頁本文)

ホ 昭和十三年六月十八日(土)、恵山か、玉谷氏と(第57頁本文、脚注)

ヘ 昭和十三年六月二十一日(火)、恵山か(第57頁本文、脚注)

ト 昭和十三年十月七日(金)、恵山か(第57頁本文)

チ 昭和十三年十月十八(火)、十九日(水)、恵山、玉谷氏と(第3頁脚注)

リ 昭和十三年十二月八日(木)、恵山か(第57頁本文)

ヌ 昭和十三年十二月十七日(土)、尻岸内、玉谷氏のみ(第72、73頁本文)

ル 昭和十三年十二月十八日(日)、尻岸内、玉谷氏と(第67頁本文、第72頁本文・脚注)

ヲ 昭和十三年十二月十九日(月)、尻岸内、玉谷氏のみ(第67頁脚注、第73頁本文、74、75頁本文・脚注)

ワ 昭和十四年十一月八日(水)、恵山(第27、28頁本文。なお手帳にも記録あり)

カ 昭和十四年十一月十八日(土)、恵山(第27、28頁本文。なお手帳にも記録あり)

ク 昭和十四年十一月二十七日(月)、恵山、玉谷氏のみ、実施したか不明(第26頁本文)

タ 昭和十五年十一月十八(月)〜二十日(水)、恵山、名取・玉谷氏と(第21〜23頁本文・脚注。ただしこの記事に紀年はない)

ナ おハを除いては、明記されていなくても玉谷氏が参加したものとみてよさそうである。昭和十三、十四年記事は第58頁脚注にあるとおり十四年十一月二十九日の日記購入以後に、主に本文欄に転記されたものと考えられる。

ニ 日記の購入から年明けまでの十四年末の記事は脚注欄に紀年なしで書かれたが、例外的に本文欄に及ぶ際には行頭に年次を付して記入した模様である。

ノ 以上のほかに、年不明の次の発掘がある。

レ 不明年三月十七日、尻岸内、玉谷氏のみ(第41頁本文)

ソ レと同年三月十八、十九日、尻岸内(第41、42頁本文・脚注)

ツ レと同年三月二十一日、尻岸内、玉谷氏のみ、実施したか不明(第44頁

和十一年に展開されたいわゆるミネルヴァ論争から当時まだ日も浅く、文献上の蝦夷を執拗に石器時代人とみなして強い影響力を持っていた(馬場はか一九三六など)喜田貞吉博士が没したのはようやく昭和十四年であったことを考慮する必要がある。

第77頁 十二月二十八日 土曜日 乙巳 本文

「(へ)行省略、なおこの頁全て鉛筆書き」

「不統一な民族を吸収しつゝ、着々と統一残存せつある開化せられざる当時」に於ける「国家を發生し」

「發展しつゝ、ある民族の文化は其ラツ外にある弱少な北方系の民族間」

「相互作用をも包摂して遂に単一文化を」

「結成し終つた今日石器時代人」アイヌ民族の「一系例の」

「終焉を單なる」緊民族相互の關係に眺める事はた当ては」

「ない」なぜならば最初北進した民族の血液は不斷に北方系を接収して量的な変化から質的な」

「変化を圓□□□□に以南に於てなして□□□□居る此の変化せる血液か、最後迄北方へ後退し」

「た民族が極北の文化」

を「(より底い文化民族の影響) □□□□受ける事によつて」

「發退を制約されつゝ、同時に高い文化を支那より□□□□を北方より些かに」南方」よりは」

「強力に受けつゝ、後退をよぎなくされつゝ、同化され」

「又一つの変化をなしとげた□□□□」

「た結果である」

「前進しつゝ、あつた民族自体と後退しつゝ、」

「あつた民族とは既に生活表面の」關係を異にするのみで近代に於ては」

「血液に於ては既に近いものとなりつゝ、あつた」

注一 行頭の余白に「15/12/24」と横書きする。頁全体にこの日付が通用するものかは不明。

二 「吸収しつゝ、」は「退ふて」と書いて縦線で抹消した右脇に書き添える。

三 この行「残存」から「於ける」までは割り込み符号を付して右脇に書き添えたもので、原文

では「發生し」まで改行なし。

四 「其ラツ外にある」は割り込み符号を付して右脇に書き添える。

五 「な北方系の」は行右脇に書き添える。

六 「包摂」は「併合」に上書きしたもの。

七 「遂に」は行右脇に書き添える。

八 「文化を」の下に「主張し」と書いて縦線で抹消する。

九 「石器時代人」は行右脇に書き添える。

十 「單なる」は行右脇に書き添える。

十一 「なぜならば」から「血液か」までは行右脇から脚注にわたる空間に延々と書き添えたもので、原文は「極北の文化」まで改行なし。

十二 上書き等のため判読しかねる文字が3字以上ある。

十三 書き添えのそのまた行間に恐らく3字を書き添えてある。判読できないのでこの位置に挿入して読むべきものかどうか不明。

十四 「つゝ、」は「ると」に上書きする。

十五 「化を」から「些かに」までは割り込み符号を付して右脇に書き添える。原文は「南方よりは」まで改行なし。

十六 「方」は「北」に上書きする。

十七 「は」は行右脇に書き添える。

十八 不明字は糸偏の文字(「結」など)の書きかけらしい。

十九 「表面の」は割り込み符号を付して右脇に書き添える。

第78頁 十二月二十九日 日曜日 丙午 本文

「紋様に於て複雑な変化を示し乍ら」一貫

「した径路を示して居る即ち縄紋土器の日本」

「列島に於ける縦走」が南より北に向つて居る事

「である主流は決して北方より南方へ向つては居ら」

「ない」

注一 この頁全て鉛筆書き。前頁と筆跡も類似しており昭和十五年以降記事の可能性が高い。

二 「」は「を」に上書きし、「於て」は行右脇に書き添える。

佐々木さんか来て居た先日の礼^三を云ふ

注一 正しくは第V輯(山内一九四)で昭和十五年一月発行、図版45は横浜市境木発見の荒海式土器である。このあたり昭和十五年に入ってから加筆しながら十二年日記を転記しているらしい。

二 「に」と「値」の間に「与する」と書いて縦線で抹消してある。

三 「宏子」は能登川氏の次女、「健ちゃん」は能登川氏の長兄二郎氏の三男健二郎氏であるが、深野せき子氏より御教示いただいた。行頭の余白に「に」と横書きするが、十二月二十二日の頁には十分な余白があるので、この記事は第72頁から続く昭和十三年十二月十八、十九日の発掘記事に関連するものと考えざるを得ない。したがってこの項の「小包」は、第67頁脚注の「小包」と同一のもので、後に続く第75頁本文の「尻岸内出土の銚」は昭和十三年十一月十九日に玉谷氏が発掘したものであるように思われる。

四 先日の礼とは佐々木氏宅地出土の鏝を譲り受けたことに関するものと思われるので、これは十四年暮れの内容である。第26頁本文注三参照。

第74頁 脚注

〔図15〕

第75頁 十二月二十六日 木曜日 癸卯 本文

〔尻岸内出土の銚に附て〕

糸を切るのももどかしく開封して見ると銚は下図の様な形式であった

此の銚は銚先も銚の身も銚の燕尾も皆圧縮せられて恵山式の銚先丈け

の様な形を成して居り廻転を求めめる索孔は全体の中央部より前方にあつて

キテ形であろうが他の形式であろうが銚の索孔は通常中心ヨリ後方にある勿論此の銚が其

先端に

石鏃を挿入する様に成つて居れば問題は無いのだがそんな風には見えないし又其余地もない程索孔は先端間近五分のところにある考へ得られる他の道は此の

銚か若し未完成品であるならば

先端が引割られて金属か挿入せられるか或は此の形式の儘用ひら

れるかの何れかであるが然し此の銚か廻転した姿を後者の場合で考へて

見れば〔図16〕図の如き状態を呈するか^四或は〔図16〕状態に成

り場合に依つては一度打込んだ銚か抜けて来る恐れがありそうである

注一 「キテ」判読確定でない。

二 「他の形式であろうが」は行右脇に書き添える。このため原文は「キテ」から「先端に」まで改行なし。

三 「通」は「普」に上書きする。

四 「か」は行右脇に書き添える。

第75頁 脚注

〔頁右端に図16〕

第76頁 十二月二十七日 金曜日 甲辰 本文

今朝電車でカネ上の息子に会つて鏝の事を話す三枚鏝と称して、

桃山時代のものだとの事鏝を眺めて居た一昨日のことを思ひ出した其時裏

側にも一枚附着して居た跡蹟があつた成程それであの跡の錆付

いた部分が判然とする残念な事だ三枚が一枚欠けては考古学的

には□い資料でも骨董的な価値は失はれてしまつた今度

佐々木氏に當時を回顧して式^{カネ}かを確かめる様に玉谷氏に葉

書を出した此の鏝に依つて恵山の石器時代の上限か桃山時代

であり下限は有史時代にあるやに思はれる。

注一 行頭余白に「に」とある。この項は十二月二十三日(第72頁)以下に昭和十三年十二

月十八日の発掘記事を転記した昭和十四年末以降の記入であろう。第26頁本文注三参照。

二 「カネ上」原文は曲尺形と「上」を組み合わせた屋号。

三 「稱して」の下に「伏見」と書いて縦線で抹消する。

四 「式」の下に「一枚か否」と書いて縦線で抹消する。

五 「あるやに思はれる」のみ鉛筆書き、後補であろう。今日からみると時代錯誤であるが、昭

発掘を初めて

約三十分の後上方×地点¹貝層²中央部ヨリ水平に横はる骨針一個を得て共々に嬉ぶ
石錘か魚形石器の折れか不明なる石器³と得し時玉谷氏の発見せる土
器の文様は他の出土品の紋様か全く恵山式（仮称）と同一なるに拘
らず全く累なる風貌を示して居る第三図に示したのかそれである飛雪粉分
三時過組合釣針鐵断片尖頭器一を得四時近くに致つて犬頭蓋骨一個を発見

注一 行頭余白に「1938」「1218」と横書きする。

二 「丸井」原文は文字でなく井桁を丸囲みした屋号。

三 この頁の脚注欄の図によれば現在大淵遺跡 (B-106) として周知されている埋蔵文化財包蔵
地に相当することが確実である。

四 「下方の」行右脇に書き添える。

五 「石英質」行右脇に書き添える。

六 「再び発掘を」は割り込み符号を付して行右脇に書き添える。原文では「但」から「初めて」
まで改行なし。

七 「上方×地点より」と行右脇に書き添えて「より」を縦線で抹消する。

八 「層」は行左脇に書き添える。

九 「同様」と書いて「様」を縦線で抹消し右脇に「一」と書き添える。

第72頁 脚注

〔図13〕

第73頁 十二月二十四日 火曜日 辛丑 本文

尚骨器中

前日玉谷氏発見の匙はオツク来、のスプーンとは累なり邦国の茶さじを聯想せし
める形態で嘗つて恵山貝塚にて採集したる管骨製匙断片も斯る形式の
ものと推知せられる裝飾品用の有孔骨器は食事に下る寸前に得たるもので上端
か欠損して居る

今日昼玉谷氏より電話にて銚一本採集したとの報告に接した蛙又云々

より察すれば燕形銚と思はれる宛に角椀法華一恵山一尻

岸内三遺跡は同一文化である。尻岸内は両者より遅れた時

代のものである。特に恵山は層位の數、並¹土器の種類が多い点²

其他諸々の事情より他の両者よりは長い歴史を持つて居たと思はれる熊石ヨリ亀田に

至る線は松前が播居して居つた以前に日本海方面に盛行して居た亀岡

式に對立して居たものは此の恵山式

〔頁左端の余白に鉛筆書きで一行あり、略す。〕

注一 「居」は不明の一字に上書きする。

二 行頭の余白に「1938」「1219」と横書きする。

三 「る」は「り」に上書き、「特に」は行右脇に書き添える。

四 「數」の下に「の多い所」と書いて縦線で抹消し右脇に「並」と書き添える。

五 「点」は「事」と書いて縦線で抹消した右脇に書き添える。

六 「他の両者よりは」は行右脇に書き添える。

第73頁 脚注

〔図14〕

第74頁 十二月二十五日 水曜日 壬寅 本文

土器製作者ではなかつたらうか

日本先史土器図譜第4輯第四五の土器の紋様は

弥生式と縄紋式の差異を除けば器形とともに全く同一

である41

亀岡式土器が海浜近き遺跡に於ても貝塚を共なつて居らない事は

注目に値する恵山式か亀岡式末期から移行したとすれば新

しい未開拓地へ向つたと考へる

午後三時頃宏子、と健ちゃん、が玉谷の小包を持つて来た玉谷に丁度先日

餅米を送り今日七分搗きを日本□□より送る

地主の

「原始社会に於ける絵画の意義を点検し我々は次の二つの結論に達する」

一、絵画は抽象的でなくつねに具体的である。それに向かつて行為が加へられる処のものである

二、絵画に対する行為が対象自体に対する行為であるやうに絵画の占有は同時に対象の占有である」

ピオトロフスキー

「最も多様な物品を裁断する為に用ひられる小刀は概して多かれ少かれ同一の形体を保持し得るが一度その道具が何らか一つの用途にあてられるに到ればそれは他の用途に移るに際してその形態を変へざるを得ない」

ダービン

注一 以下括弧内は『原始共産社会』154頁からの引用

二 以下括弧内は『原始共産社会』187頁により、この項(第三編第一章)の著者クリチエフスキー

一が「種の起源」第五章から引用した文章を孫引きしたもので「ダービン」はCharles Darwinである。

第69頁 脚注

「機能の変化は、
形体の変化を
起ひ起す」

ベルンシュタム

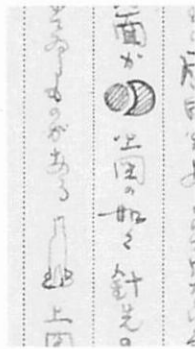


図3

注一 括弧内は『原始共産社会』188頁からの引用で、著者クリチエフスキーが前頁のダーウィンからの引用を言い換えたもの。「ベルンシュタム」は同書第三編第二章の著者で、能登川氏の抄録の誤りである。

第70頁 十二月二十一日 土曜日 戊戌 本文
組合釣針発生の理由

「機能的变化は形態的变化を呼び起す」ダービン
組合式釣針は鹿角製釣針に比較して大形である此れは鹿角製

釣針の大きさが材料に依つて殆んど限定されてゐるに掛らず組合釣針は二個以上の部分より形成される関係上遙かに大形のものを作成する事が出来る斯る大形の釣針は大形の魚を捕獲する目的から其要求に応じて考案せられたもので単に補修に便宜な為のみ製作されたのではなく

目的物の大小に其発生の原因がある。昭和十三年一月五日

組合釣針接合部中央断面(図3)上図の如く針先のある部分の方が他方に抱合され逸脱を防ぐ様に製作せられてゐるものがある(図3)上図の骨器は凹部に鐵の部分

注一 「限」は「決」に上書きする。

二 「な」の右脇に鉛筆で「である」と書き添える。

三 「のみ」は行右脇に鉛筆で書き添え、かつ注二の「である」の下部に上書きする。

四 「其」は不明の一字に上書きする。

五 「ある」の下に「二」ではないだろうか」と書いて鉛筆の縦線で抹消する。

六 「逸」は不明の一字に上書きする。

第71頁 十二月二十二日 日曜日 己亥 本文

点添して一種の釣針として用ひたものではないだろうか南洋には同形態の釣針が當つて行なはれて居た、

第72頁 十二月二十三日 月曜日 庚子 本文

七時三十分大門発

八時鮫川発遅延拾時尻岸内着丸井旅館にて労働服に着換直ぐに現状に

行く由利病院裏手段丘に至る。既に昨日より玉谷氏A線にて示した部分を発掘済みであつた石のところが約三十分掘り鯨肋骨一本出土せる時農夫が来て貝は段丘末端の方に多いとの事考慮の上矢印の方向より発掘を初める。十二時迫出土品皆無但石の附近にて石皿一個下方の×地点にて石英質石皿一個を得貝食も早々にして馳上り再び

注一 行頭の余白に「昭和13」と横書きする。馬場脩氏は昭和八年以降五回にわたって占守島で発掘をおこなっているが、その報告に記号のある銘頭は登場しない。

二 以下括弧内は「芸術の起源」(クローセ一九三〇) 175頁からの引用。

三 以下括弧内は「芸術の起源」176頁からの引用。アンタマン諸島住民についての記述である。

四 能登川氏が「南千島出土の骨器を多量に見た」のは、あるいは昭和八年夏に札幌・小樽・函館・旭川の今井呉服店四店舗を会場に開催された「北海道原始文化展覧会」の際ではなかったかと思われる。この展覧会を機会に刊行された図録「北海道原始文化展覧会」(原川会編一九七七)の第四十一―四十四図版からスケッチしたと思われる南千島出土の骨器の図が、一節で紹介した「スケッチブック」の中に見られる。

五 この行は頁左端に書き、行頭の余白に「1939」と横書きする。なお「十二月十八日の発掘」は第72頁本文にあるように昭和十三年のもので、「1939」は十三年の発掘記事を転記した十四年暮れの日付を示すものであろう。本頁脚注も参照。

六 この行は頁左端に書き、行頭の余白に「1939」と横書きする。なお「十二月十八日の発掘」は第72頁本文にあるように昭和十三年のもので、「1939」は十三年の発掘記事を転記した十四年暮れの日付を示すものであろう。本頁脚注も参照。

七 の第四十一―四十四図版からスケッチしたと思われる南千島出土の骨器の図が、一節で紹介した「スケッチブック」の中に見られる。

第67頁 脚注

玉谷氏ヨリ石田覚蔵(磯谷温泉)

に托した小包到着す

組合釣針AB 2、

燕形(未完成) 鋸 1

尖頭器 3

骨鑿? 1

其他

計 十九点

十二月二十三日

Belt of one thousand Knot

千人針、

注一 石田覚蔵氏は津軽深浦出身の鉱山技師で、字根田内磯谷(現在の字御崎の一部)に温泉の権

利を購入して大正初年に営業を始め、磯谷温泉として知られていた。平成十二年の土砂崩れ災害で石田家は移転を余儀なくされ、現在は字恵山で「石田温泉」として営業している。

二 二十二日の記事がこの頁にあるのはこの小包が十二月十八日および十九日の発掘による出土品であることを示すであろう。したがってこれは昭和十三年の日付と解される。第74頁本文注

三 参照。

三 以下2行は頁左寄りに横書きする。

第68頁 十二月十九日 木曜日 丙申 本文

「リアリスチックな絵画と並んで図型的な絵画もある而してその意味について現在必ずしも明瞭ではない。これらの簡略された図型はリアリスチックな絵画の類型化の過程において得られる。斯やうな類型化を我々は

屢々見る斯やうな図型はその後発展して裝飾の型をとり往々その最初の意味を失つてゐる。動物の全体の代りに屢々その一部

例へば、頭、毛、眼、角だけが描かれる多分それは全体を意味するのであろう」

「芸術の故郷や中心地を求めることも正しくないし芸術を人種的に特徴に帰するのも誤つてゐる既にグロッセはテンと論争して^四人種の特徴は芸術の発展に対し何ら決定的な意旨^五を

注一 以下括弧内は「原始共産社会」(マトリン編一九三五) 151頁からの引用。

二 「の」の下に判読困難な1字あり×で抹消されている。

三 「原始共産社会」152頁からの引用。

四 「グロッセ」はErnst Grosse (57頁脚注の注二参照)。「テン」はフランスの哲学者Hippolyte

Adolphe Taine (1828-1883) の *Philosophie de l'art* (1865-1869) などの著書を通じて芸術が民

族性、風土等によって規定されていることを説いた。

五 1字塗りつぶして抹消した右脇に「ギ」と書き添える。

第69頁 十二月二十日 金曜日 丁酉 本文

を有さない事を指摘した」

を有さない事を指摘した」

異同の詳細は略す。以下に続く同書からの引用についても同じ。

二 「漁」原文は賦編となっているが誤字とみて改めた。「魚漁」の文字は能登川氏の挿入である。原典の狩猟採取という言葉に漁撈が含まれていないのが不満だったのであろう。

三 以下2行は頁左端余白に書かれる。

四 河野広道博士、河野（一九五九の3頁）氏は「昭和初期に能登川降氏から事告にあてた私信」のあったことを紹介している。

五 函館の西隣、上磯町在住で考古資料の収集家として有名だった落合計策氏（一八九二—一九六八）であろう。落合氏についてはその収集品の図録（国立歴史民俗博物館編二〇〇一）を参照。

第64頁 十二月十五日 日曜日 壬辰 本文

「する（オーストラリア人の木製棍棒図）ポリストコフスキー著 十一頁

(2) 「当然起る疑問はマンモスや犀の如き巨獣を槍や棍棒の武器を

持った原始時代の狩猟者が如何にして征服したかと云ふことである」が

「恐らく野獣の習癖を充分に知り巧妙な動作によつたであろう

例へば現在、ネグロインド人が象や犀を捕へる折に好んで用ひる方法

は其背後から忍び寄り斧や時としては日本製の剣で強い一撃を

与へ、アキレス腱を断切るのである

（1行空き）

（全国六百有余の貝塚中、鯨骨出土貝塚は 個所である）

注一 行頭の余白に「昭和12」と横書きする。

二 「十一」の上にならり空きがある。なおこの引用は原典47頁からのもので、著者は「ポリス

コフスキー」が正しい。

三 (2)の括弧内は『原始共産社会』65頁からの引用。「日本製の剣」は原典では「木製の剣や槍」となっている。

四 「個所」の上に少し空きあり、数字を挿入するつもりであったろう。

第65頁 十二月十六日 月曜日 癸巳 本文

組合式釣針とは二個以上三個の部分で樹脂様のものに依つて膠着せしめ

其上を縛結し一個の釣針の機能を發揮せしむるものを言ふのである

この組合接合釣針は朝鮮及内地方面にも出土するらしく、南鮮東

山洞貝塚出土骨器（史前学雑誌五ノ四所載）東亜古代史講話

赤松啓介著（引）図中³（或 124等）ドルメン日本石器時代

53頁第十八箇中括として扱へる⁷は明に部分Cに属するものである

「我々は最近恵山発掘中組合された状態の組合釣針を発見して

従来我々か発見した釣針が独立した用要具でないと思ひました 此の外に

組合式の釣針が尙在在して居ると思はれる材料がある…

注一 赤松啓介の著書『東洋古代史講話』（赤松一九三六）の第三三圖として韓国東三洞貝塚出土

の骨角器の図（横山一九三三の図版第四）が転載されている。

二 「ドルメン日本石器時代」云々については第60頁本文注二を参照

三 「明に」は割り込み符号を付して行右脇に書き添える。

四 「の」は「で」に上書きする。

五 「我々か」は割り込み符号を付して行右脇に書き添える。

六 「の」と書いて縦線で抹消し右脇に「した」と書き添える。

第67頁 十二月十八日 水曜日 乙未 本文

「馬場発見の北千島古守の銚頭にある記号は恵山には全く見当らない」「エスキモーが彼等の器具殊にその矢及び鋸を見分けるために用ひ慣れた記号」を用ひない事は北漸を否定する材料にも成る。此処では「各狩猟者かその柄に武器に頼ひつける紐の特別な結び方に依つて彼の矢及び槍を見別ける」風習が行なはれて居つたろうか且つて南千島出土の骨器を多量に見⁵が、記号は見当らなかつた。馬場の創作に掛るものではないか事実とすれば北千島のみかエスキモー文化の影響下にある

⁵十二月十八日の発掘記二十三日に記載する

(1) 日本石器時代ドルメン所載第二頁の銚と称するものの中に組合釣針の銚がある。

銚には無銚、片銚、両銚の三種がある

注一 行頭の余白に「[B]」と横書きする。第58頁本文から続く記事なので、昭和十二年十二月に書いたという意味であろう。

二 「第一」と「頁」の間に隙間あり、確認して後で補入するつもりであつたらう。ここで言う「日本石器時代」云々は「ドルメン」第四卷第六号の「特輯日本石器時代」、「組合釣針の銚」とは同誌所載の「日本石器時代の遺跡と遺物」(「ドルメン」編輯部編一九三五)第一八四の7かと思われ、463頁に掲載されている。第65頁本文を参照。

第61頁 十二月十二日 木曜日 己丑 本文

銚は針の粗大形のものに柄を附して用ひ漸次片側鐵両側鐵に發展し柄部も初めは縛結したものであるが 入式となるこの式は銚か目的物に突入せる場合柄は分離して浮袋に依つて浮遊するのである一方アイヌキテ形即ち燕形銚先が表われて来る此の銚の特徴は銚の先頭の強度鋭利を増大する為に石銚を附し大魚の捕獲を目的から制作せられたものであろう此の骨角と石銚の合製銚は金属器の輸入の増大に従つて樺太千島島出土並アイヌ土俗品の如く金属と鹿角の合作に変ずるのである
銚は銚が発達するに従つて柄部より離脱する機構に変化するが石銚から骨銚、金属銚と逐次材質の変化過程を経て

注一 「針の」の下に「削大した」と書いて縦線で打消し石脇に「[B]」と書き添える。

第62頁 十二月十三日 金曜日 庚寅 本文

依然として柄部に固着される特徴を持つて居る恵山出土の骨銚は柄部末端に近き所二ヶ所に隆起を作り縛結を容易ならしめて居る

我が国では古くより□銚が用ひられて居るか鳥骨管針等の存在より推察して竹銚、木銚が用ひられたと考へられる(1)
(一) 行空き)

道具の發明は人間と猿類の限界点である。道具の發展史は人骨の發展史である。道具は一度發明せらるゝや他の道具を急速に駆逐する場合もあるが文化の遅々たる原始時代に於ては總てか雜然と存続し縄文土器より弥生式に移行後もなを強力に其存在を主張して居るのを見る恵山貝塚も同じく該

注一 「植」字の左脇に横線が一本あり「二」字のようにも見えるが不明。

第63頁 十二月十四日 土曜日 辛卯 本文

当時代に於ける新田の諸用具を包摂して居る

(1) 古生人より我々に伝へられたものは石器及び骨器に過ぎない。何做なら数万年に亘つて有機物、木材、獸皮等が保存されることは不可能だからである、然し我々は原始人が石器と共に木器をも用ひたと考へて全くよいであらうと思はれる何做なら木材は甚だ容易に手に入り甚だ且つ石材よりも加工が容易であつたから。かやうに石器時代に先立つて木器時代が行はれたと見るべきである、最初の木器は棍棒であつて、それは打撃用にも擲用にも用ひられ大槍棍棒枝―土を掘るためには若干の変つた棍棒が用ひられた―これ等の道具は現代もしくは死滅した狩猟ニ魚漁、採取種族、オーストラリア、タスマニア人、ブッシュマン其他の經濟に於て第一義的意義を有

十二月十四日河野博士西に手紙を出す
上磯落合より来る

注一 (1)は早川二郎の訳書「原始共產社会」(マトリン編一九三五)47頁からの引用。この本は市立函館博物館に寄贈された能登川氏の旧蔵書の中にある。なお引用文の細部は原典と異なるが

著書『De Afbang der Kana (1884)』、『芸術の始源』の題名で大正十年に岩波書店から和訳本が発行され、昭和十一年に岩波文庫版（グローセ一九三六）が出ている。諸民族の経済形態と美術様式との対応関係を説いたこの著作の第八図には動物意匠の裝飾があるエスキモーの骨製品が示される。

四 「岩壁に印刷せられた魚」は「芸術の始源」第二十三図にあるものを指すと思われる。
五 「削」字、原文では目偏に作るが誤字とみて改める。

第58頁 十二月九日 月曜日 丙戌 本文

「原始人が最初に狩猟＝漁撈生活、即ち採取経済時代に用ひた労働要具は一本の棒であつた。此の唯一の生産手段である棒は分科して針、槍、鋸、釣針等の所要の目的に従つて独自の発展方向を取つた。換言すれば上述の諸労働要具は歴史を辿るに従つて其祖形は何づれも一つの変鉄もない棒に還元されるのである。今其進化過程を叙述するに当つて読者への願は此の不完全なる所説の誤謬を是正されん事である。

幾多の原始民族が現今尚使用しつゝある棒は前述の如く原始人に取つて唯一の労働要具であり武器であつた該当時代に於ては大小の差こそあれ貝殻から其の身を取り出す楊子、大公望の如く

注一 行頭の余白に「12129」と横書きする。

第58頁 脚注

十一月二十九日日記帳を購入してより一週間十三年度の日記の一部を漸く整理した殆んど発掘日記丈けを本日記に収録した
それも随分飛び飛び

により付けて無かつたし加筆した部分もあり削除した箇所も多い
(以下2行省略)

第59頁 十二月十日 火曜日 丁亥 本文

其楊子の中間に糸を結んだ釣針、少しく大形なる銛ピン更に大きい槍、棍棒、ステッキ等々此等の棒類は人間の生活確保に重大な役割を演じて居た

針は無頭楊子形、有肩形、有眼形の三つの段階を経て始めて現今の針を形成するに致つたものであるが其祖形は棒の一端を尖頭にした丈けのものであつた。

針に糸を附した釣針の大形のもの其儘銛として魚の捕獲に役立つが、針と銛の形体上の分別は鐵の発生から始まる又釣針との分別は先頭部を湾曲せしめる時から確然と別たれる湾曲せる釣針は対照の大いさに依つて屢々損傷する為に第二段階

注一 「針」の前に「釣」と書いて縦線2本で抹消する。
二 「屢々」の2字は行右脇に書き添える。

第60頁 十二月十一日 水曜日 戊子 本文

に於ては随時補修出来得る様二個自至(1)三個の部分品を結合縛結して一個の釣針として使用する様に制作せられ或は其泥弱性を補強する為に基部に段階、線刻を附して緊縛する方法が行はれた

湾曲した釣針は其当初鈎でもあり、手鈎又はマレットポでもあつたであろう(手鈎形、マレットポ形骨器等は円筒土器と共にサイベ沢より出土して居る)

ければならないと考え初めた次で第四図を得るに至つて此等の全部は恐らく同一の用具であり他の骨角器に比較して文様を印刻し或は動物を表現して居る

もの或は動物を附したものの差異はあれ必ず動物をシンボライズしているこの^四傾行は髯鏡に形体上も近似して居る点等より考へ、当たらずと云へとも遠からずと愚考する。然し一見風貌の近似はしいものがベルンソンに依つてエスキモアの

釣竿の先と証明せられた頭髮ピンの如く大きな用途の差異を型体にのみ

盲従して分類した結果大きな誤謬を冒した例もある

今にはやに断定すべきではない今後続々発見され

髯鏡設も撤回しなければならぬ時が到来する□^六も

知らない此処では漁撈^{II}狩猟の代表的経済

関係を表現した宗教的色彩の濃厚な作品として

動物付骨器と命名するに止めて置く可きだ

注一 行頭の余白に「[518] [1218]と横書きする。

二 「発見」付近の行右脇に「無孔針と重なつた状態で」と書き添えた後縦線で抹消している。

三 「或は」行右脇に書き添える。

四 「シンボライズ」の下に「した」と書いて縦線で抹消しその下には割り込み符号を入れて

「して居るこの」の6字を行右脇に書き添える。

五 「分類した」の4字は割り込み符号を入れて行の右脇に書き添える。

六 一字不明、「哉」に似ているが異字。

第57頁 脚注

第三図 狐

第一図 狐頭部

第二図 魚形 (図型化されしもの)

第四図 魚形 (鯨)

狐を附した骨器はアイヌの祖先

チロンノツブ (黒狐) を聯想させる

児玉博士は笄、釵、の類だが

アイヌは断髪で結髪して居ない

従つて馬場の云ふ如くオーツク文化だ

恵山式石ナイフはオーツクのウーマンナイフ

た等と云つて居るが如何かほしい

臆説だと思ふ (アイヌに櫛はある)

土器から云つても北海道式式は

陸奥式と云ふ方に親近を

見出す傾向がある

グローセ原始芸術第八図b、桶

の取手に彫刻せられた魚、オストラリ

ア人の岩壁に印刻された魚の形

態は側面、観俯^五観の二様を示さ

れて居るか参考に値する

原始芸術の近似性が明かに

観取出来る

注一 「児玉博士」は函館で少年時代を過ごし、昭和四年以降北大医学部教授として北海道と周辺

の人類学研究を推進した児玉作左衛門博士 (一八九五—一九七〇)。昭和十二年に北大解剖学

教室は日本民族学会とともに北千島・樺太調査をおこなつたが、この調査で発掘を主導したの

が函館出身の考古学・人類学研究者である馬場脩氏 (一八九二—一九七九) であつた。注二で

述べるようにこのころ児玉氏・馬場氏と能登川氏の間には交流があり、能登川氏は自分の発掘品

を示して両氏の意見を求めた模様である。なお児玉氏・馬場氏の収集資料が能登川コレクション

と並んで市立函館博物館の重要な収蔵品となつて居ることは改めて言うまでもない。

二 馬場氏が昭和十二年の北千島占守島での発掘調査を紹介した文中に「此等の竅穴の三三から、

エスキモアのウーマンナイフ様の石器を数箇出土したが、此の物は (略) 南北海道の恵山附近

の遺跡から函館市の研究者能登川清氏が多数発掘せられ、資料写真を送附せらるゝ筈になつて

ある」(馬場一九二七の78頁) と見える。第67頁本文の注参照。

三 「グローセ原始芸術」はドイツの美術史家・民族学者であつたErnst Grosse (1862-1927) の

二 「の遺蹟」は割り込み符号を入れて行の右脇に書き添える。脚注の図によればこの遺蹟は市電より海岸側、実成寺墓地の西にあつたらしく、現在のところ埋蔵文化財包蔵地として周知されていない地点である。

三 「以」は「以」字を横線で抹消したもののように見えるが不確定。

第50頁 脚注

〔図12〕

第52頁 四月十三日 土曜日 丙戌 本文

七日に発見した環状石斧の尖頭部を眺め乍ら昨年十一月十八日中段発掘の際（完形の無孔銛発見箇所）得た環状石斧が同一品であつたならと思ひ返して居たか何分出土地が二十間以上も離れて居り一方は貝塚の底部であり一方が中段であり石の色も異なつて居つた為にはして見たか合せて見た事はなかつた今何の氣もなく合せるが一厘のすきもなくびつたりと合つた驚いて好く石を見ると石質は同一だそうた一方の出土箇所は炉あとと思はれる一尺五寸に近い灰層中であつた嬉しさに階下へ飛び降りて家内に話す家内や陽子^四は私の狂喜を忘然と眺めて居る又階上へ駆け上りメンダインを探して早速接合する考へであつたか中止する一応玉谷氏に見せようとして共々に嬉んでもらおう発見當時も此んな事とは知らずに玉谷氏と同一品ならと語つたものであつたが玉谷君も好く石の色を覺て居つて違ふだらうと言つて

注一 行頭の余白に「1238」〔昭和13〕と横書きする。

二 「色」は上書きされているがもとの字は読み取れない。

三 この「灰層」はここによると重要遺跡確認調査の報告で「火山灰層A」とした赤みを帯びた火山灰層であるかも知れない。この層は縄文式の遺構の上の窪みに溜まり厚さ70センチに達する場合がある（財団法人文編二〇〇四）。

四 「家内」は能登川夫人の米子氏、「陽子」は夫妻の長女である旨、陽子氏の長女である深野せき子氏より御教示いただいた。

五 「の事」に上書きして「言つ」に改めているように見えるが不確定。

第53頁 四月十四日 日曜日 丁亥 本文

居た発見後旬日にして一体と成つた斧も満足であらうしあの広い遺蹟で偶然にも両者を得られたものだ全く偶然だ

環石の出土例も全国的に僅少だが此の倒卵形石斧は多に類例はない縄紋土器より弥生式に渡つて出土し原始農業の鍬として用ひられたと考えられてゐる

注一 「全」字は割り込み符号を付して行の右脇に書き添える。

第55頁 四月十六日 火曜日 己丑 脚注

〔拾六日発掘の為恵山へ行く〕

十七日発掘 （四月六日発掘図×箇所）

十八日 休

十九日発掘

発掘遺物

土器三個

骨器断片

組合釣針（未完成□） 1

土偶把手

注一 行頭の余白に「1238」〔丁〕と横書きする。

二 原文は「×」の前で改行しており、左右2行の上下を一組の括弧でまとめてくつた状態である。

第57頁 十二月八日 日曜日 乙酉 本文

六月十八日我々か始めて第三図を発掘せる當時は両者は別個のものであり一方は櫛（千島風）で一方はスプーンか何かそれに類似の用具と解釈して居つたが二十一日第二図を発見前者とは全く異なつた鋭（鋭）であらうと考へて居たか十月七日第一回十二月八日に無孔針（或はピン？）を重なつた状態で出土した際我々の決論は否定されな

第46頁 四月五日 金曜日 戊寅 本文

〔四月五、六、七日の発掘〕

出土遺物

(イ) 筭形骨器(未詳) 三 1 (ロ) 組合釣針 1組 外に鐵1片

(ハ) 鳥骨管大針 1 (ニ) 鳥骨製小針 2

(ホ) 鈺(破片) 2 (ホ) 人体 一個

(ヘ) 板状裝飾品? 1 (ト) 環状石斧1(四、二四五を参照の事)

(チ) 牙製品(有孔) 半切1 (リ) 片半1 鐵1

早朝出發登惠山下車玉谷氏朝より荒掘に従事して遺物(イ)(リ)を採集

したとの事早速見たが用途不明の骨器である(図2)(リ)と同一個所から

出度したとの事或は複鉤ではないかとも思はれる帰つて母に見せると網針だろう

と言はれる網針としては足部の末端の湾曲して居るのか解せない

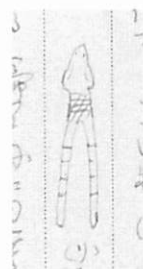


図 2

注一 行頭の余白に横書きで「昭和13年」とある

二 一字不明、言偏を持つ漢字(記)などの書きかけのようにも見える

三 「(未詳)」は行の左脇に書き添える

四 「外に鐵1」は行の左脇に書き添える

五 四月十四日の意味であろう。環状石斧の記事は四月十三日の頁に見える

第47頁 四月六日 土曜日 己卯 本文

惠山の校長も来て一緒に発掘したか(ヘ)一個の発見に止まつた七日は(ヘ)の下方から人体を発見初め玉谷氏が鹿の骨だろうと云つたので首りみずに掘つて居ると頭部が表はれ初めて人体と氣附出来る丈け骨片を集めた副葬品は(チ)(ト)(リ)一か一尺と離れな処から(同)一層で地下六尺)出土したのみで皆無に等しい

〔発掘中表土が崩れて下敷に成り玉谷氏に救ひ出された後表土下三尺貝塚の上層

末端を掘つて居ると土器の半截が出て来た強て引くと貝塚だから訳なく取れた返して

見ると土偶付把手であつた(此時は未だ土偶把手が全国的に珍らしいと云ふ事を

知らなかつたが完全品があつたならと思つた)此の土偶付土器の上に別に半截の土器

があつた此れも紋様器形共類例の少ないものでA図様の如きものである

注一 惠山小学校は昭和十二年四月末まで間谷市三郎氏、それ以降相沢潔氏が校長となっている

(尻岸内町々史編さん委員会編一九七〇の719頁)のでこの「校長」は間谷氏であろう

二 「チ」に「へ」を上書きする

三 「子」に「へ」を上書きする

四 「出」字に「同」を上書きする

五 行頭の余白に「(ト)」「(リ)」と横書きする(「ト」は「出」に上書きしており、「(リ)」には下線

がある)昭和十二年四月六日の記事としてここに書き写したのち記憶を訂正したものか、第55

頁脚注を参照 なお「(ト)」「(リ)」と読むことも不可能でない

第47頁 脚注

〈図4〉

第50頁 四月十一日 木曜日 甲申 本文

〔住吉町墓地貝塚発掘〕

青柳町市電停留所並に谷地停留所の中間×印地点の遺蹟を偶然に発見

(アイスキャンデー共同経営営業所谷地終点に行く途路)

土器三個に該当する破片を従業員佐々木と共に採集、二個は殆ど

全貌を測知出来る程度の土器他のは断片に過ぎなかつた

紋様幾何学的沈線紋不連続刺紋地紋、斜行縄紋北海道

式土器後期と思はれる一体旧時貝塚を形成して居たと推察せら

る石匙一ヶ(図12)以、図上のもの出土せり

注一 行頭余白に「1938」「(十一)」と横書きする

第41頁 三月十八日 月曜 庚申 本文

午前八時出発十時十分尻岸内丸井旅館着早速着換いを済し

て由利病院裏段丘にて発掘を成す昨日玉谷氏発見の人体を頭部

より初め□る処図Aの処にて短刀一振(腐鏽甚多しく採取の際柄部

を折る)大腿骨中央に第二図様の水晶の親玉を発見 左右の手^四

「腰部上に置き」上膊関節近くに「瑪瑙石の(図10) (長い) 不正三角形の」自

然石が置きて「又趾の処に組合釣針の鏝(完全) 一個胸部に鏝と覺しき金属等が

あつた渡島半島に於ける後期縄紋式土器時代の

埋葬、墳墓形式の一例として貴重なるものである

写真に示せる如く表土五寸6.5尺×3.5尺×1尺の矩形の郭内に人体を納め

上部より貝殻を以つて覆つて居る

午後は次頁に示す処にて玉谷氏第三図様の動物骨偶骨器を発見

五時据風呂に入つて八時就寝

注一 「丸井」原文は井桁を○で囲んだ屋号である。

二 由利病院は字大淵に開業していた医院で、この頁の脚注の図によれば能登川氏が発掘したのは海岸の宅地から大淵の八幡神社に上がる道路の両側であつたらしい。現在大淵遺跡(500)および大淵遺跡C遺跡(510)として周知されている埋蔵文化財包蔵地にあたると思われる。

三 「発見」と「左右」の間に「俯視して」(原文では「俯」字を自備に作る)と書いて縦線で抹消、その右脇に「足方ヨリ」と書き添えてそれも縦線で抹消している。「左」は行右脇に書き添える。

四 「手」の下に「は胸部」と書いて縦線で抹消。

五 「腰」の上に「に右手は」と書いて縦線で抹消。

六 「に置き」は行右脇に書き添える。

七 「上膊」と「瑪瑙」の間は「V字の尖端に」と書いて縦線で抹消しその右脇に「関節近くに」と書き添える。

八 「不正三角形の」は、「(長い) およびその下の短い空白(自)より上」の右脇に書き添える。

九 「又」以下「金属等が」までは行の右脇に削り込み符号を入れて書き添えたもので、それを

除いた原文は「土器時代の」の後で改行している。

第41頁 脚注

〈図10〉

第42頁 三月十九日 火曜日 辛酉 本文

午前七時より着手玉谷氏は人骨発見届に行き単独にてやる昼近く玉谷氏組合

釣針の完全品を 発見自分も釣針を発見したが残念にも表土の凍結部分に□部か

あつたらしく凍結部分を取除いてから初めて気付き(図11) 結局点線にて

示した部分は採取出来なかつた午後は全く目ぼしい収穫なく些かに骨製

管玉を得玉谷氏は(図11) スプールの如き柄の附きたる尖頭器を得たのみ

である本年度第一回の発掘は斯くて上々の成績で終つた此の分で行けば

尻岸内の骨器も百点や二百点は短時日に蒐 取集で来るであろう

忘れて居たが土器完全品一個を得た玉谷氏の土器は整型したが一部分

不足

注一 「の完全品を」は行右脇に書き添える。

二 「蒐」と「取」は左右に並ぶ。「蒐」が右。

三 以下2行手が変わりインクの色も異なる、後補か。

第42頁 脚注

〈図11〉

第44頁 三月二十一日 木曜日 癸亥 本文

十九日に玉谷氏と約した様に恵山出土の人骨と尻岸内出土の人骨とをすり換

る為に送つてやつた未だ玉谷氏より電話があつた処を見ると未だ居るらしいが

北大関係の遺物蒐集もやつて居るのではないだろうか何んだか変な気も

する

注一 「より」は「また」と書いて縦線で抹消した後で行の右脇に訂正したもの。

二 この行「種」以下は、「事に決定される。」と書いて縦線で抹消し行の右脇に訂正したもの。

第27頁 脚注

土と兵隊の「前売

券を従業員に

与へる

注一 火野葦平原作の小説を映画化した「土と兵隊」(田坂智隆監督)は昭和十四年秋の封切りで

ある。

第28頁 日付なし 本文

らも、石匙三、石斧二、石鏃九、曲玉一、曲玉原石二、土器二(118の分)

土器二、玉(軟石)二、石鏃一、があり一様に、土器、石器、

玉の三種がある。

注一 「石鏃九」は行の左脇に付記する。

二 「二」原文は横書き。昭和十四年十一月八日の意味と思われる。

第30頁 十二月一日 日曜日 戊寅 本文

サイキス・タスク(俗信と社会制度) フレイザー著 岩波版162頁

殺人者の隔離と潔めの慣習の中に昔のバ・ロンガ人の刺青の文献

を一つ発見した。

「その昔バ・ロンガ人は一つの眉から他の眉にかけて、特別な印を刺青した。此の時には恐ろしい葉が刀痕に種痘せられるので

あつて、その結果として『眉を撃めると野牛のやうな相好を呈する』

腫物がその部分に出来るのであつた

注一 James George Frazerの著書 *Pagan's Task*(1909)は昭和十四年六月に岩波文庫の一冊(フレイザ

一九三九)として和訳が刊行された。引用は同文庫からのものである(該当の文章は162頁ではなく163頁に見られる)。

第36頁 三月三日 日曜日 乙巳 脚注

「釣針並に銛の発明は

個人的漁獵を發達

せしめ特釣針は老弱

男女あらゆる氏族成員

を漁撈への動員を可

能ならしめた

片舟を海上に浮べて積

極的だか釣針自□は

銛に比較して消極的

な魚漁法である

銛に正中線を引き其の

左右を比較すれば両側

鐵片側鐵共々総

て不均等である

不均等な事は銛の正当

な機能が合理的に

構成せられて居るのを

実証して居る

注一 行頭に横書きで「163」とある。

二 「を」は行右脇に書き添える。

第一孔墓 土器壺形二 石匙一 石鏃一 (図9)一

(図9)

第二孔墓 石匙一 石鏃二 石錐一 石刀子一

黄々色。朱塗無紋 縄文土器 深一米四十

(図9)

注一 以上2文字、及びこれと図を結ぶ矢印は他の部分と異なる意味の強いインクによる、後補か。

第23頁 脚注

〈頁右端に寄せて図9、その後頁左端の近くまで空き〉

四時五十分ニテ古武井発

帰函

第26頁 十一月二十九日 金曜日 丙子 本文

「一昨日日和見約三時間恵山に行かぬと決心して電報を

打った時は少し淋しい気がしたが一方母の温い思やり

を深く感じて郵便局を出た時にはすつかり諦めて豊

かな気持に成つて居た天候さへ好ければ昨日も今日も発

掘して居る筈であつたが非常な積雪と寒気なので

押して行かなかつたのは何よりだと思はれる 行つても

縮まつて仕事には成らなかつただろう 佐々木の主人

の厚意を受けて銀覆輪の鍔をもらつて来て居れば良

かつたと思ひ乍ら玉谷君に再び行つてもらつて来て呉れ

る様にと手紙を書く事にする 恵山貝塚の年代

注一 行頭の余白に横書きで「1936」とある。

二 「も」は行の右脇に削り込み記号を入れて付記する。

三 字恵山の佐々木家の敷地で掘り出された鍔は「北海道恵山先史遺物図集」に掲載され、能登

川氏の手帳にも昭和十四年十二月十七日付けで佐々木氏から送られてきたこの鍔についての記載がある。この鍔が出土した際、腐朽した刀身のほかに勾玉、石斧、土器を伴ったと言い、貝塚のある段丘上でなくその崖下からの発見ではあるが能登川氏はこれが恵山貝塚の年代を示唆するものとみていた。第76頁本文参照。

第26頁 脚注

週刊朝日の増刊

を見て此の日記

を買ふ

毎年の事だが

今年是非共

終り速書き続

け様と決心した

最後のトラピスト

バター缶入を支

配人に売った

第27頁 十一月三十日 土曜日 丁丑 本文

を決定する最も重要な遺物だから。

昨夜去年の日記帖を繰返し誦読して恵山発掘

日記が余りにも遺物にのみ捕はれ□きで居るのに今

更乍ら悔を感ずる少なくとも去年の発掘だけでも

今少し科学的な方法で遂行して居たら今年の発掘

がより 以上の意義を持つたろうにと。

又拾八日に発掘した遺蹟は八日の遺蹟と同様墳墓

で埋葬形式は伸展葬であり特記すべきは頭部

を大きな玉石で覆て居る積石墳墓の初期のもの？

貝塚墳墓は副葬品皆無に比し此等の墳墓は些か乍

ミリ撮影機を下にして
20円附加して買った
独製ドツベルを又二下追に
して買った写真機は

意外にも高級品で150円
以上中古で離しても儲か
るとの事全く意外
だった

型も手札と思つたのが
合版であり谷口にある
ツアイスイコンと異なつて
四本足で立つ構造は
ツアイスイコンより優秀
だと兄も嬉んで居た

注一 「又」は行の右脇に割り込み記号を入れて付記する。

二 「此儘」と書いて縦線で抹消し行の右脇に「中古で」と書く。

三 「兄」は巴之助・セキ夫妻の長男一郎氏である旨、能登川氏の孫である深野せき子氏より御
教示いただいた。

第14頁 一月七日 日曜日 己酉 本文

中支無湖鏡湖では湖面にタライ舟を浮べ両手両足を外方に出し魚を手
づかみにする 全く原始的な方法の魚漁である
(以下6行省略)

注一 この頁の天余白に「Life is a chance of Chance」と横書きする。

第20頁 本文 十一月十七日 日曜日 甲子

「玉谷氏来る一緒に恵山に発掘の為午後四時の自働車にて
立つ名取氏と同室にて寝る

注一 以下二行頁左端に書く。

二 昭和八年七月には函館から般法華までの自動車道路が完成し、当時は下海岸自動車株式会社
の運行するバス便があった(尻岸内町々史編さん委員会編一九七〇の662-667頁)。停留所のあ
る字古武井から遺跡までの約5kmは徒歩か騎馬によつたようである。宿泊は遺跡に最も近く、
字恵山で現在も営業している原田温泉を利用したらしい。

第21頁 本文 十一月十八日 月曜日 乙丑

第一墓孔出土品土器壺形一、甕形一、碗形一

〈図7〉 真鍮製未伴品一石槍一石鏃一

第21頁 脚注

〈図7〉

第22頁 本文 十一月十九日 火曜日 丙寅

第壹孔 石鏃大形一 小形二 共に有柄 石ナイフ一 未完成石器一

石斧二 魚形石器一 魚石一

第貳孔 石匙一 魚形石器

〈図8〉

第22頁 脚注

〈図8〉

注一 図の中に他の部分と異なる黒味の強いインクで「1/2」「1/3」と読める文字が書かれる。後
で書き加えたものらしい。

第23頁 本文 十一月二十日 水曜日 丁卯

第6頁 本文 十月二十九日 火曜日 乙巳

石器整理分類をなす

1 刀子形 (図6)

2 三角形 (図6)

3 蹄形 (図6)

4 ナイフ形 (図6)

5 石鎗 (図6) ツマミ付

5 B (図6) 有柄

6 鋸頭 (図6)

7 石錐 (図6)

7 B (図6)

13 石棒

C (図6)

8 石匙 A (図6)

靴形 B (図6)

9 石鏃 A 有柄 (図6)

B (図6)

C 柳葉 (図6)

D 無柄 (図6)

10 石斧 A 片刃 (図6)

B 片刃 (図6)

C 環状有孔 (図6)

11 トンガ形石器 (図6)

12 魚形・紡績形石器 (図6) A (図6)

注一 行頭に「8」と書いて斜線で抹消、また「靴」字に「足」字を上書きし、それを縦線で抹消して右脇の行間に「靴」と書き添える。

二 「B」は「形」字右脇の行間に書き添える。

三 「A」は「石」字左脇の行間に書き添える。

四 「鏃」字に「頭」を上書きする。

五 「13」を△で囲む。

六 行頭に△で囲んだ○の印を付す。

七 行頭に△を付す。

八 図の下に「磨製□」と書いて縦線で抹消、□は書きかけの文字とみられる。なお「トンガ」は「唐銀」であろう。

九 「魚形」は「紡績形」の右脇行間に書き添える。

十 「A」は「紡績」の左脇行間に書き添え、その下に図がある。

第6頁 脚注

10-3 磨製石器

注一 「〇」は行頭に横書き、行は本文の「10石斧」の行の真下にある。

第8頁 本文 一月一日 月曜日 癸卯

亀の正月をした起きて居た時間は恐らく三時間もなかつたろうが起きて居る

時に丁度奈良崎が来たので独乙製ドツベル写真機で四枚撮影したが皆

ピンボケであつた今年には写真を少し験究し様と思ふ今迄の考へでは

活動写真で記録的な場面を取らうとしたが此の考へはフィルム^{キネマ}の今日で

は許されない事であり馬鹿しい徒費である文字と写真に依つて記録され

る可きて発掘記録映画等は嘗つて聞いた事が無いそれを遂行し様とした処に

無理があつたし撮影方法を熟知しないでそんな野望を起したのも間違で

あつたと思ふ 近接撮影を考究して図版を造るのに暫時努力

を集注する事にしなければならぬ

注一 「キネ」は空白をとつてその右脇に細字で書く、漢字を補入するつもりであつたろう。

第13頁 本文 一月六日 土曜日 戊申

立派な写真機が手に入つた此後近接写真を研究して図版を造る

事に努力する事にするその為には費用が相等入用だから雑誌書籍の

経費を少なくして其方へ振向ける 読書より写真への大転換だ

母が云ふ様に「満州で写真屋でも出来る」写真の技術が急速に発達

する様努力しなければならぬ 年齢も正に四十 急げ急げ七十才の父

の年齢迄生きても残り些かに三十年だ

注一 能登川氏が数え四十歳となるのは昭和十六年。

第13頁 脚注

谷口時計店から 9 1/2

注一 原文のまま。あるいは「校長」の誤りか。

二 現在「浜町砂丘遺跡」の名称で周知されている埋蔵文化財包蔵地（周知資料登録番号B-113）に当たると思われるが、今日では貝塚を確認することができない。

三 「組合」の二字は「釣針」右脇の行間に付記する。

第3頁 脚注

二十九日

豆腐屋裏手の傾

斜面中段約一間四方

位の貝塚層より銚

一（尾部一部破損）

〈図5〉猪様の頭部ある骨

器断片一を発見

十八日

今春発掘せる段丘上

〇X貝塚南側より円底

〈図5〉土器一個アスファルトの多

量に附着した中央に

〈図5〉溝のある壘形石斧一

を発見した丈で十九日

は午后迄腐って居た処

豆腐屋のおやちが来

て中段の遺蹟を指示

され玉谷氏が手鍵で

ひとかき二かきすると

飛出して来たのが猪やう

の頭をもつ骨器であ

つた

注一 行頭余白に「昭和13」[1938.10]「18・19」と横書きする。

二 当時豆腐屋を営んでいた字恵山の大坂家を指す。傾斜面中段の貝塚層は昭和五十八年の防災工事でコンクリート擁壁が作られた範囲にあると考えられ、今日では確認することができない。

第4頁 脚注 十月十九日 土曜日 乙未

猪とすれば猪牙製首飾

及腕環（？）と共に猪の

生棲せる実証として重

要な遺物である

札幌・樺太方面ヨリ出土

の猪の遺物（自然的）と共に

にプレキストンラインは

完全に打破される

（昭和十四、十二、四一）

〈以下6行省略〉

注一 十月十九日の頁にこの日付が見られるのは昭和十二年の記事を十四年暮れに転記し、加筆したことを意味するらしい。第58頁脚注参照。

第5頁 本文 十月二十八日 月曜日 甲辰

本年度第二回目榎法華行（第一回本月十八日）前回に引換へ収穫なし

コーヒーコップ形土器一個のみの収穫であった

第5頁 脚注

コーヒー

コップ形土器

〈図1〉



図1

六、ここで「文身抜粋集」と呼ぶもの。印刷物から刺青に関する記事のある箇所を丁単位で切り離し、折った厚紙に挟んで糸で綴じ、ペン字横書き(ただし右から左)で「文身抜粋集」と題する。材料となった印刷物は11種あり、判型は一定しないが四六判からB6判と思われるものが主、筆者にわかる範囲では『アイヌの足跡』(満岡一九二四)『ノア・ノア』(ゴオガン一九三三)などを含む。

七、ここで「スクラップブック」と呼ぶもの。コクヨ製A4判、右綴じ濃緑色化粧厚紙表紙の既製品で「INDEX」と印刷した扉の後に25葉の用紙がある。図書や新聞の切り抜き、写真、手紙、手書きノートなど多様な素材が貼り込まれ、あるいは用紙の間に挟まれている中で、注目されるのは能登川氏の手になる遺物のペン画で、遺物の出土日付とみられるものが記入される場合があり、日記等との照合ができる。

以上のようにかなり多量の資料が残されている中で特に「日記」を選んで紹介しようとするのは、そこに能登川氏の調査内容が氏自身の手で、しかもおそらく調査後それほど年月を置かない時点で記録されており、一次的な資料としての価値が高いことによる。

注一 平成十五年年度の調査報告書には「北海道恵山先史遺物図集」を複製掲載した(財団道埋文編 一〇〇四)。

二 日記の記事

ここでは「日記」記事のうち、考古学・人類学に関連するものと筆者が判断した文章の全てを掲載する。前述のとおり各頁に本文欄と脚注欄があるので記事を「本文」と「脚注」とに分け、現状の頁順に配列した。複数頁にわたって本文欄から本文欄へ、脚注から脚注へ続いている記事は読み取りにくくなっていることをお詫びしたい。改行箇所は特に注しない限り原文どおりである。文中の空白はなるべく原文に忠実に再現したが本来手書きであるので正確を期し

がたい。段落冒頭の空白(インデンチャー)はほぼ認められなかった。図の挿入は〈図〉の形式で位置を示し、図のある頁を略表大で複製してその内容を示した。

原文は「当用漢字」「現代かな遣い」以前の文章であり、手書きであるので漢字は当時の正体と草体ないし略体が混用されている。さまざまな問題はあろうと思うが書体は「常用漢字表」と「表外漢字字体表」に例示されているものに倣い、これらの表にない文字は原文に近いと思われるものを選んで用いた。ただし人名等の固有名詞では「常用漢字表」に付記されている康熙字典も参照してより近いと思われる方を当てた。また熟語を常用漢字で構成されるものに差し替える等のことはしていない。なおこの扱いは日記記事以外(例えば引用文献の著者名、書名等)についても本稿を通じて同様である。難読の文字は□で表し、判読に自信のない文字は右下に「カ」を添えた。

草体・略体で「常用漢字表」と一致すると思われるものはそのまま用いた。変体かなは時折「ㇿ」「ㇽ」が「た」「に」と混用されるが明確な規則性を認めがたいのですべて「た」「に」に統一した。かな遣いも原文のままで、当時の標準と考えられるものとは必ずしも一致しない。促音・拗音の箇所や外来語で小字が使われる場合とそうでない場合があり、一応原文に忠実に作ったつもりであるが手書きのためそれほど意味をなさないと思われる。濁点も原文に従うよう努力したが、判断に迷った箇所が少なくない。

第3頁 本文 十月十八日 金曜日 甲午

本年度秋第一回発掘行

赤澤先生並長と共ニ假法華湾中貝塚ヲ発掘ス

遺跡は假法華恵山尻岸内古武井と。同形式

〈図5〉 狐付髯ベラ骨器一

〈図5〉 一個 〈図5〉 二個

〈図5〉 一個 スプーン一 組合釣針三 土器一(赤澤氏へ)

住の玉谷勝氏とともに繰り返した調査で貝層から多くの精巧な骨角器を得たことが北大農学部の大飼徹夫氏や名取氏から注目され、共同調査が計画されるに至ったようである。この間考古学・人類学への造詣を深めた氏は昭和十二年に先史考古学会（『先史考古学』第1巻第3号「会員氏名」）、昭和十五年に日本人類学会に入会し（『人類学雑誌』第55巻第4号「云報」）、その逝去まで人類学会員でありつづけた。昭和十七年には自ら撮影した遺物写真で構成した図版集『北海道恵山先史遺物図集』を版行したが、戦中戦後の社会の混乱もあって公表の意図は十分に達せられなかった。能登川氏は戦後も研究を続けながら恵山貝塚の発掘報告を刊行しようとしたものの果たさず、昭和三十三年（一九五八）年四月十四日に亡くなった。

氏の収集品とともに昭和三十四年五月に遺族から市立函館博物館に寄贈された研究資料として、今日次の七件が保管されている。

一、ここで「日記」と呼ぶもの。縦19×横13センチ（四六判）の市販の日記帳の製本をばらして四十葉を抜粋、光沢のある薄い洋紙を折った表紙に挟み、糸でかがっている。縦罫で脚注欄があり、各頁の版面内天小口寄りに月日、曜日、干支が印刷される。干支からすべて昭和十五年の日記帳であることを確認でき、月日の重複もないのでおそらく一冊の日記帳から抜粋されたものと思われる。内容は次節で紹介する。

二、ここで「手帳」と呼ぶもの。黒革表紙、縦約17×横約11センチの三穴バインダー手帳で、鉄製綴じ具にはプレスで「HB」の商標が見られる。縦165×横88または93ミリの横罫・方眼罫リフィル100葉（うち何らかの記載のあるのは74葉）と住所録用にアルファベットの見出しがついた厚紙13葉が綴られている。

内容の大半は恵山貝塚の調査とその出土品についての記事で占められ、主に恵山貝塚の報告書の雛型として準備されたもののように思われる。「手帳」記事の一部は佐藤智雄氏によって紹介されており（佐藤二〇〇一）、平成十五年度の調査報告書でも一部を複製掲載した。住所録部分の「KI」と「MN」の間には恵山貝塚調査中の能登川氏と玉谷氏を写した白黒写真一葉が挟まれている（財団道埋文編二〇〇四の84頁）。

三、ここで「スケッチブック」と呼ぶもの。型押厚紙（元来銀鼠色か）の表紙、スパイラル綴じのスケッチブックではぼA5判、縦約22×横約15センチ、扉を別にして15葉の画用紙が残っておりいずれも奇数ページに骨角器のペン画が描かれる。扉にはペンで「恵山貝塚骨角器」の題があり、表紙にも縦書きの鉛筆字が認められるが傷んでいて（あるいは意図的に削られていて）判読困難。同型のスケッチブックから切り離した画用紙が扉の前には11葉、裏表紙の前にも4葉挟まれており、そのすべての片面または両面に骨角器のペン画がある。

四、ここで「考古学ノート」と呼ぶもの。横罫糸かがり、厚紙表紙のノートに橙色の洋紙で手製のカバーをつけている。表紙にはペン字横書きで上下に「会計簿」「S. Takayama」の二行の間に鉛筆横書きで「Archaeology」とあり、裏表紙には縦組み印刷で「統制品 中等学校 B6 小口四十枚 北海道紙製品工業統制組合 製造者北海道学習ノート株式会社」の文字が読まれる。内容は考古学関係の聞き書きと文献抄録からなり、タカヤマ氏がある程度書き溜めたものを能登川氏が引き継いで書いたとみられる。聞き書きには「1949.5.26」から「1955.3」までの日付が見られ、話者として「河野博士」「名取博士」の名が多く挙がっている。

五、ここで「尖底土器ノート」と呼ぶもの。ほぼA5判、縦約21×横約15センチの布表紙（元来カーキ色か）の横罫ノートブック、用紙は一折16丁で10折あるが最初・最終丁が見返しの利き紙となっているので記入可能なのは318頁。これを右綴じに用い、天小口に1から133までのノンブルが書き込まれる。ノンブルのある頁にはほぼ漏れなく横書きの記事があり、その後もノンブルで141に当たる頁まで飛び飛びに記載がある。内容はほとんど尖底土器についてのノートと文献抄録で、ノンブル121の頁に「北海道に於ける尖底土器」と題して書物の章立てとみられるものが記されており、能登川氏がこの題名で著書を準備したことが知られる。記事にほとんど日付がないが、ノンブル135にあたる頁に「32/10/21」とあり、この「32」はそれ以前の頁に引用された文献の刊行年からみて昭和32年を意味する。

能登川隆氏日記の考古学・人類学関係記事

故 能登川 隆(解説 西脇 对名夫)

はじめに

津軽海峡東端の海岸に位置する恵山貝塚は、北海道南部の縄文式を代表する遺跡の一つとして著名である。この遺跡が早くから注目される理由となったのが能登川隆氏(のとがわ たかし)による調査の努力であった。昭和十年代から恵山貝塚など下海岸地方の遺跡調査を通じて氏の収集した資料は没後に市立函館博物館に寄贈され、「能登川コレクション」と呼ばれて同館の先史遺物資料の重要部分をなしている。このうち恵山貝塚出土品の多くが函館市指定の重要文化財として特に慎重に管理されているほか、道指定重要文化財「般法華出土尖底土器」もこのコレクション中のものである。これらの貴重な出土品とともに市立博物館に寄贈された氏の研究資料の中に、恵山貝塚の発掘に関する記録が含まれていることは関係者の間で知られていたものの、最近までその内容が紹介されたことはなかった。

平成十五年、筆者は北海道教育委員会が財団法人北海道埋蔵文化財センターに委託して実施した恵山貝塚の実態把握のための調査に参加し、発掘の一部を担当したほか「関連資料調査」の名目で過去の発掘による出土品や記録類等の調査を担当した。この際筆者らは市立函館博物館の御好意によってある程度時間をかけて能登川氏の研究資料に接することができ、このうち昭和十五年十一月に能登川氏が北海道帝国大学農学部(当時)の名取武光氏とともに実施した

発掘の記録と考えられる部分を調査報告書に紹介した。この発掘は十九基にのぼる「墳墓」の発見によって学界の注目を集めながらも(名取一九六〇)詳しい報告が刊行されていなかったもので、能登川氏の残した記録を通じて、その際の出土品の相当部分が氏のもとで保管され、今日市立博物館に所在することがはじめて明らかになったのである(財団道埋文編二〇〇四)。

昭和十五年の発掘に関する内容のほかにも、能登川氏の記録は恵山貝塚の初期の調査について触れるところが多く、またこの時期の道南地方における考古学研究のありさまを生き生きと伝えるものとして貴重である。ここでは能登川氏の昭和十二年以降数年にわたる日記の中から、考古学調査に関する内容の全体を紹介することにした。

一 能登川氏の研究資料

能登川隆氏は明治三十五(一九〇二)年一月十三日、能登川巳之助・セキ夫妻の三男として函館に生まれた。函館商業学校を卒業後、長兄・次兄とともに父の創業した精肉・料理店の経営に従った。「㊸」の屋号で松風町・高砂町などに店舗があり、㊸デパートにも出店していたので市民の中には御記憶の方も多いと思われる。氏は昭和五年頃から考古学に興味を持ち、函館市内やその近郊でしばしば発掘をおこなった。特に尻岸内村(当時)所在の恵山貝塚で地元

市立函館博物館 研究紀要 第15号

2005年3月31日 発行

編集・発行 市立函館博物館
〒040-0044 函館市青柳町17-1(函館公園内)
TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

印刷 (株) 島本印刷
〒040-0053 函館市末広町13-27
TEL 0138-26-1201 FAX 0138-26-0158

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No.15

Preface

SEIJI YAMAGUCHI : Life and work of Kosaburo Sakaya

TAKASHI NOTOGAWA, TSUNAO NISHIWAKI:
Archaeological and Anthropological Notes
in Takashi NOTOGAWA's Diary (1937-1941?)

2005

Publisher : Hakodate City Museum
17-1, Aoyagi-cho, Hakodate, Hokkaido, Japan 040-0044
Phone 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831